

江戸名所圖會

五

464
409
5



河崎六郷渡口より向ふ方よりありと東海道官驛の

初程品川より二里半驛舎數百軒敷くとして

小田原北条家の所領後帳に雄田新三郎及び伊勢兵庫頭間宮
所領の中は此河崎の地名あり又同書大珠寺分十九貫四百文の
川崎は伏まといふ



平安記行

河崎との海を宿り使なとあふやとらあてを
長光寺日耀上人の孫傳ふもて
馬むんとまのまふ少崎ふかききのたそりこれハ

かきめりこの里をすてこれハ能ふまは津津海
全 持資

河崎庄司次郎高重宅地 其舊地今志らくは相傳ふ高重昔滋

谷子住を後違論のりありと此地へ移り住となり又旧地堀内小
ありと山王の祠をも此河崎は遷をとつて

按長光寺は河崎にあり今も其地ありと云ふ
此驛中の地名や今も久根崎町新宿砂子町小土呂町等の名あり
相傳ふ高重昔滋



堀内山王権現宮

河崎上新宿街道の中程より左へ入る二丁

南あり相傳ひ 欽明天皇の御宇勸請せしと河崎の鎮守

中々神領あり 社司鈴木氏奉祀也 鈴木氏祖先三郎高重と

伊弉諾尊 伊弉册尊 五神合祀也

本社 祭神武甕槌命相殿 伊弉諾尊 伊弉册尊 五神合祀也

正月三日流鏑馬神事あり六月十五日ハ大祭あり十三日あり

十六日に至る大祭賑へる 其間渡田邑の海濱にあり所は旅

所へ神幸あり 遊森と号し河洗池あり傍に舟の葦河あり又

土人云此河洗池に 十五日神輿渡河の時前へ神幣七柄を持

知せし相傳ひ弘安四年川畑櫻川左近助と申あ人勅をせり

奉幣使としく 當社に向く 項の弊串なりとしく 當社第一の

神寶とせ 奉幣使の人名不審なりと 又九月十九日あを角力の伎を

與初十一月廿三日ハ八年の市立也 按は同所佐木明神の社記に佐木四郎高綱頼朝公の命を蒙り河崎

洲

河原桃林河崎渡口より大師河原迄の間わく田園悉く

桃樹を栽り 故は開花の時に至るとハ紅白色を交へて奇

除厄大師堂

大師河原にあり 金剛山平間寺金乘蜜院と号し

真言宗あり 醍醐三宝院に属す 當寺に安置せし大師の靈像を

弘法大師の真作なり 海の中より出現 此地より出現あり故にその地を

額 金剛山 石川空亮頼直筆 容殿は平間寺と書せし也

六字名號石碑 堂前左の方あり石面中は南無阿弥陀佛とあり

御せり碑 蔭は武州江戸京橋 伊國屋櫻井又大夫二月二日御靈夢の所六郷

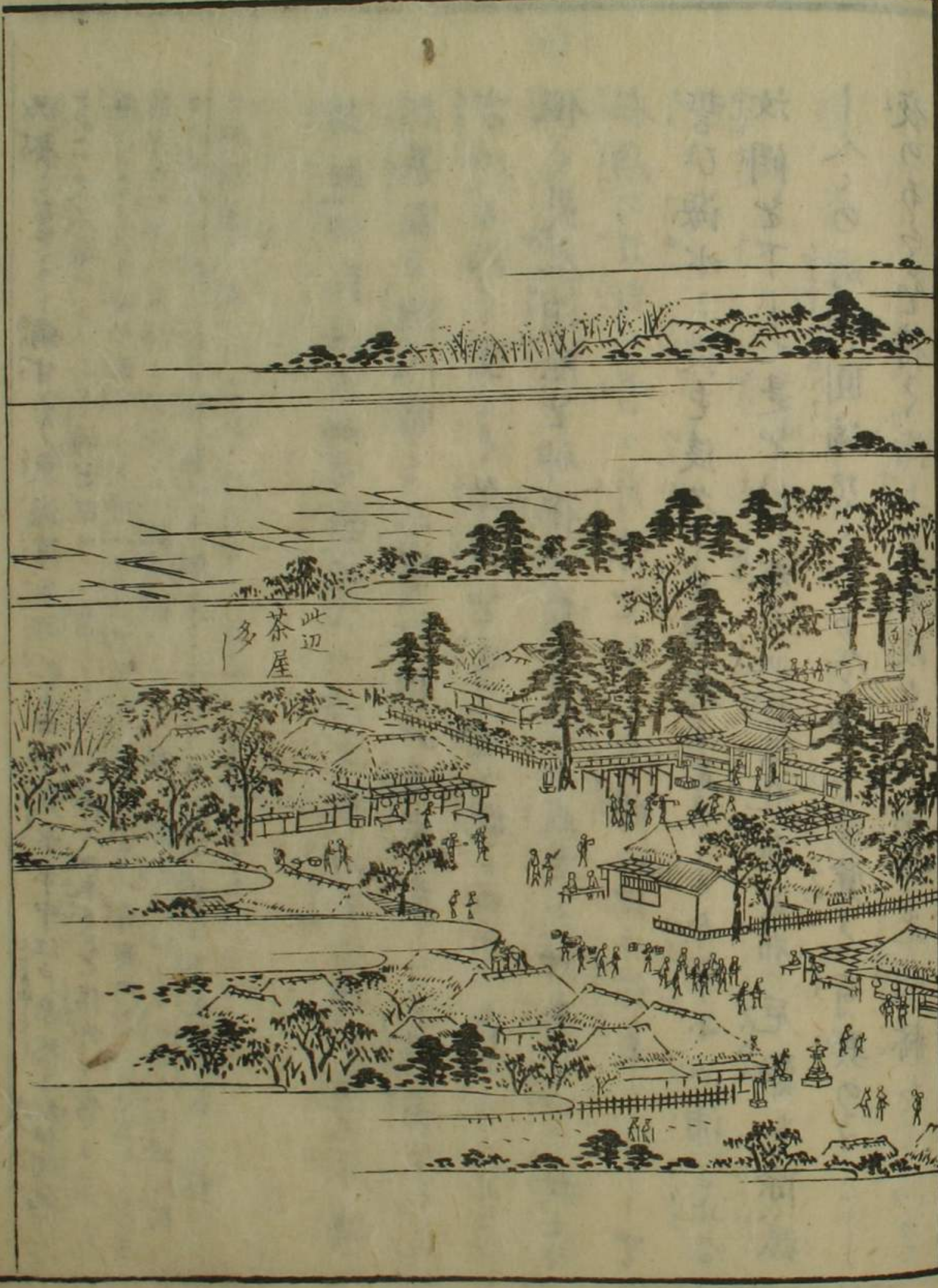
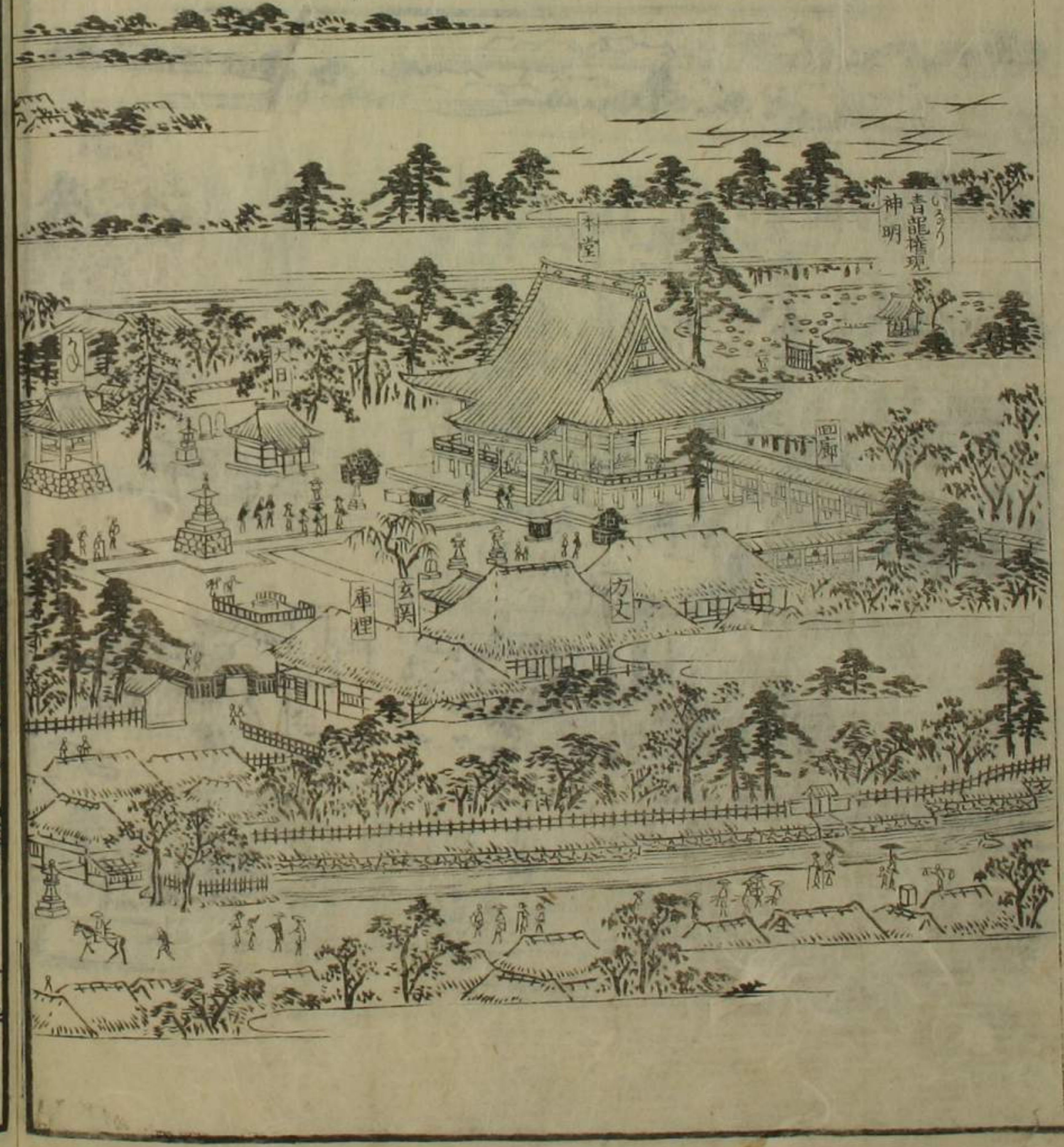
大橋の中 大師の御筆を蒙り此名号法名雪翁月盛居士万人は愚筆と添く

河崎山王社



大師河原
大師堂

正五九月の廿一日
就中三月廿一日
一日ハ影供
あまく詣人
稲麻の如く
往還の賑ひ
尤夥し



此辺
茶屋
多

供養と名をよみ、鵜付より東海道名所記に云く寛永年中江戸京橋に紀伊國屋作内
とて一文不通のものを酒を造りて業を内深く此本多と信仰し常は夢成
運ひたる小ある夜の夢中は大師六字の名号を書き教へ奇異の地ひひをなすあり
當寺の大師へ系指しゆゆ六郷の橋の上より筆一對拾ひゆゆ夫より大師の教へ
ゆゆ名号を書きゆゆ筆勢は類なるゆゆ八作内石塔は名号を書き鵜付け
大師河原より建よりされと外のゆゆ二字を書きゆゆと云く

縁起曰弘法大師の靈像ハ大治年間此所の浦に住す平間
氏某なる漁人常ニ三寶を敬み其家貧しく産業を弘ん
方便も無く空しく年月を送り迎へ既ニ四十二歳の年あり
依り災厄消除と神佛は祈りしるふ或夜大師告く曰く我昔
在唐の日自ら吾の肖像を彫り有縁の地は漂着せしむ
誓ひ海水に投を後久しく海底ありし今幸ふ此浦に止る
汝網を下して是をば永く此地に化益を布厄難を除滅
し人の所願圓滿なるゆゆゆんと漁人夢覺く奇異のゆゆと
夜のあつとを待り海上を見渡すゆゆ一條の光明赫たるゆゆ

其所は舟を寄せ網を沈降せし果し夢中に見るゆゆ此容
貌ハ毫釐も違はざる大師の靈像を得り仍し一字を創立し
平間寺と号し平間氏の号と爾來已降靈應著く常小詣人
絶るゆゆなゆゆ五九月の廿一日別く三月二十一日ハ御影供後仍
あゆゆ小大は賑はつと

蜂龍盃 大師河原村池上氏の家に蔵せり往古慶安年間此地に
於て酒戦ありし時用ひりし盃ゆゆ酒七合餘つと云
盃中蜂と龍と蟹との象を描金にせり 蜂ハさし龍ハのむ蟹ハ有と
相傳池上氏ハ小田原の北条家ニ屬し仕小田原落城の後池
上村に移り池上を氏とせ 後今の地へ此家ハ水鳥記に云えし酒客
大蛇丸底深々末裔なり 底深通稱を池上慶安元年八月江戸大
塚の地黃坊樽次 茨木春朔と稱す春朔のゆゆ八景此底深々家ニ至り
樽次底深共し酒將と名を數多の酒兵を集め敵身方と分れ

假一の法令を立てて大居目礼古佛座等の名を設けて酒量を
 様さんとく大盃を執る勝劣をどうゆをいれとせしむるは
 水鳥記に詳なり
 此書は江都との二本ありて何れも刊行せしが
 自ら著せし又此家の酒戦の時酒後示せる制札あり
 戯編なり
 今更く其半を存せり格次の書なりとく墨の跡多くなり古色疑ふるに
 されと云ふ水鳥記に於て所と必く異なり序は連る酒客の名左の如し

六位大酒官地黃坊樽次

| | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 佐保田 | 小倉 | 半齋 | 喜太 | 齊藤 | 松井 | 同々 | 佐々 | 三浦 | 木下 | 名護 | 鈴木 | 佐藤 | 毛藏 | 六位 |
| 又兵 | 又方 | 齋郎 | 太郎 | 傳左 | 金兵 | 五兵 | 弥左 | 之丞 | 奈兵 | 屋半 | 木半 | 藤推 | 藏坊 | 大酒 |
| 衛 | 衛 | 衛 | 衛 | 衛 | 衛 | 衛 | 衛 | 衛 | 衛 | 衛 | 衛 | 衛 | 衛 | 官地 |
| 忠 | 爵 | | | 門忠 | 門忠 | 酒丸 | | | 明 | 盛 | 飲 | 赤 | 黄 | 坊 |
| | | | | | | | | | | | | | | 樽 |
| | | | | | | | | | | | | | | 次 |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 武州 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 江 | 同 |
| 菅村 | 川崎 | 蕨 | 大 | 南 | 八 | 富 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 江 | 同 |
| 住 | 住 | 住 | 師 | 河 | 王 | 坂 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 大 | 同 |
| | | | 原 | 原 | 子 | 住 | | | | | | | 塚 | |
| | | | 住 | 住 | 住 | | | | | | | | 任 | |
| | | | | | | | | | | | | | 任 | |
| | | | | | | | | | | | | | 任 | |

來見坊樽持
 甚鉄坊常赤
 以上十七人

相州平塚住
 鎌倉住

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 池上 | 大蛇丸池上 | 長吉 | 百助 | 七左 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 丸池上 | 太郎 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 | 底底 |
| 丸池上 | 右衛門 | 深 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 | 成 |
| 丸池上 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 | 底 |
| 丸池上 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 | 深 |
| 丸池上 | 長男 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 丸池上 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 | 武州 |
| 丸池上 | 大師 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 | 大 |
| 丸池上 | 河原 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 | 河 |
| 丸池上 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 |

末廣松 稻荷新田石渡氏の門下あそ此石渡氏も水鳥記に
 酒徒ゆく四郎兵衛底廣と云ふ人の末なり昔を

末廣松 稲荷新田石渡氏の門下あそ此石渡氏も水鳥記に
 酒徒ゆく四郎兵衛底廣と云ふ人の末なり昔を

未廣松



庭中林泉の儲杯ありと橋の傍に下戸の葦渡屋ありと
 注せし制札を建たりと酒客宴飲の旧跡を今田園を
 なる此松も底廣り愛樹ゆと未廣とを名つけと
 此家ゆも酒戦の頂用ひと大盃ありと
 箱の蓋に水鳥底廣盃と題し又左の如くは
 楯金せりのあり
 發句を注せし

大所はありありをひて移築といふもの
 跡ありあり

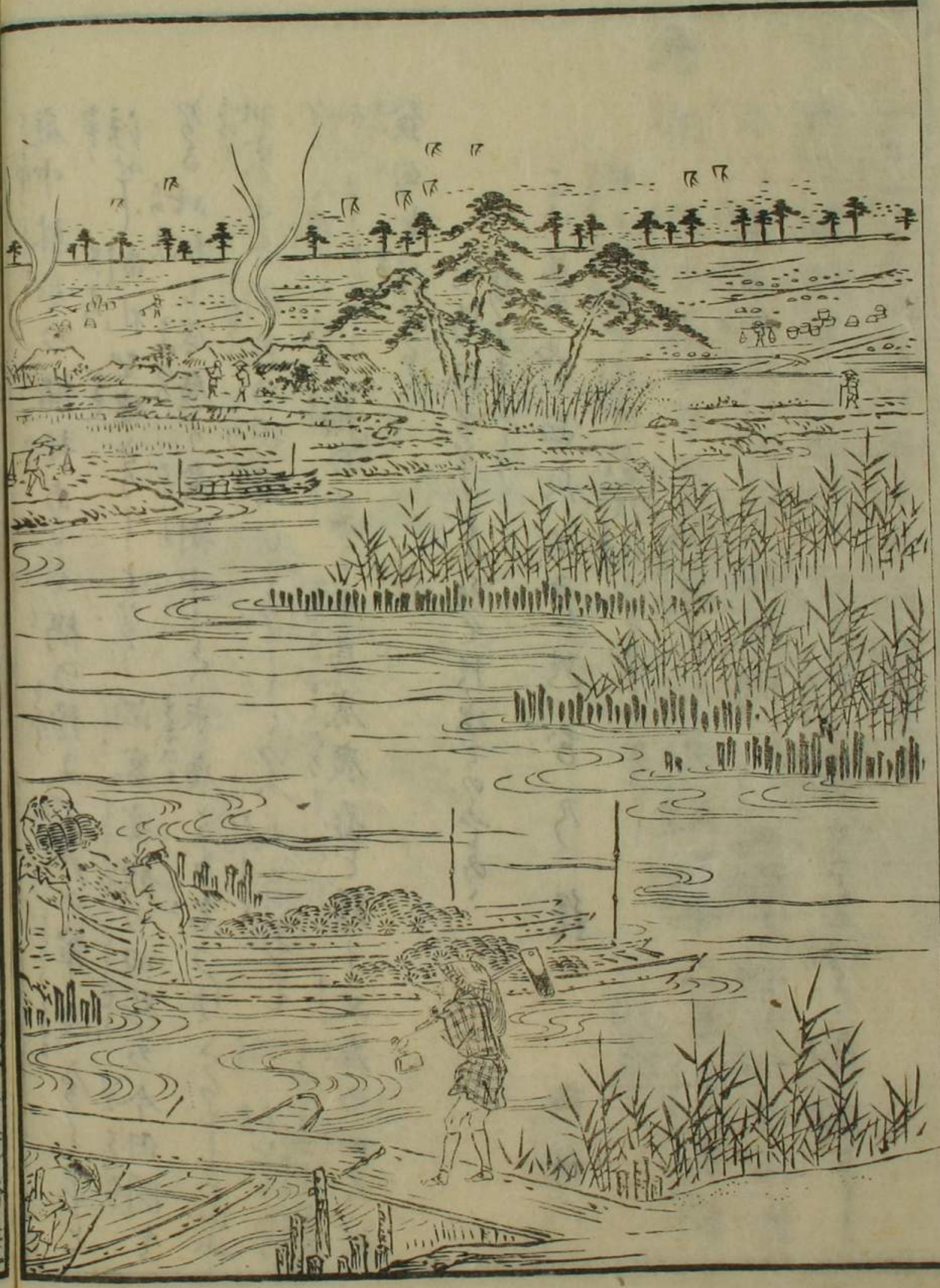
こゝ 蔓や西風上戸能か乃程

活圃

鹽濱

同所南の方北海濱なり寛文九年己酉叶榮雲
 及い泉市右衛門といふ者開初と云依今も大師河原
 川中島稻荷新田等村塩を製を以て産業とす
 その少くは此地風光甚佳景なり

河崎
汐濱



石観音堂



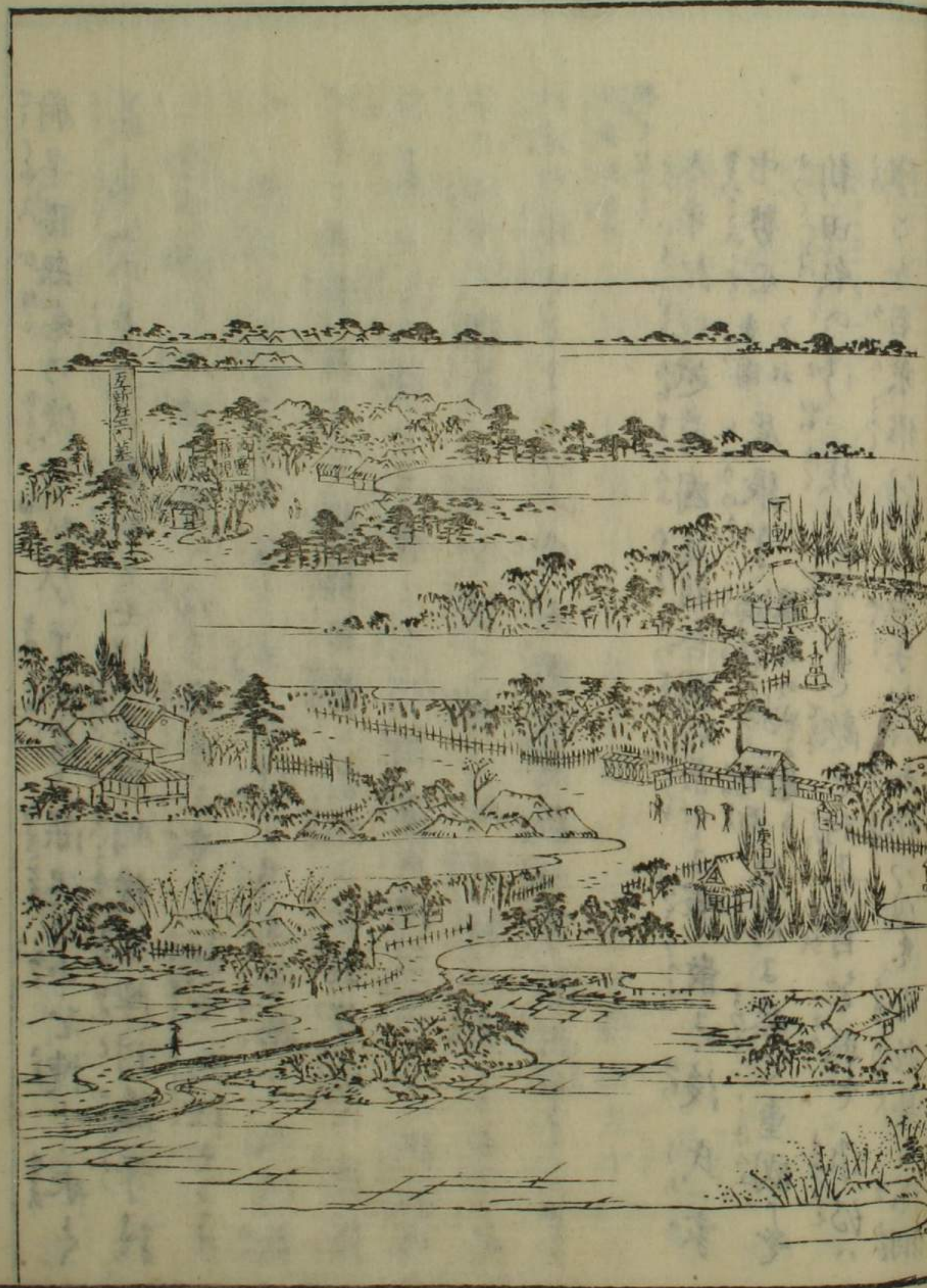
石観音堂

同所平間寺より七丁斗を南よりあり天台宗に
 して慧日山明長寺と号し本尊ハ石像の如意輪観音之
 故は石観音 毎月十七日道俗通夜糸菴を靈龜石ハ門内左の
 垣の傍にある所の石の手水鉢を以て 十八年の秋海底より出た
 不の靈石や此地の漁人引揚むとせし時二三の靈龜少く漁人と共に
 捧げ揚ぐ俤々大悲の威神ありありあり同七月晦日竟に堂前より
 損く水をこぼし

新

田大明神社 堀の内山王の社より耕田を隔て七丁斗南の方
 渡田村の道より右におあり 渡田昔ハ 例祭ハ七月二日なり土俗
 巨田ハ作 暁中を必軍馬の馴く音

云毎年正月元日と七月二日の 相傳河北矢口村ハ鎮座するゆを廢子義興公の神
 靈此社に來り 本社祭神 新田左中将源義貞朝臣の靈なり相傳義貞
 公延元二年丁丑閏七月二日越前國足羽の里に戦ひ利
 あ〜 竟に主あき矢のふさひひ〜ハ骨鯁の臣巨新左衛門



河崎新田社
 無動寺
 巨新左衛門墓



尉早勝無念の涙を拭ひて不なる深泥の中を捜し求く
義貞公の差添の名剣と七ッ入子の明鏡及陣羽織等純
三種とゆく此地は携へゆり幽室に安し朝夕給仕せり
公の生家小異なりなり早勝終は弓馬を捨人面に
せむ一向静座し餘齡を養へ然る里民等公の徳茂
追慕し三種を早勝に乞ひ清潔の地を求め孤松の
本の土中埋蔵し廟を営て新田大明神と崇まぬせ
此地の鎮守とせり河内國の後祭田等を附らむとあり
其孤松今
括てなり

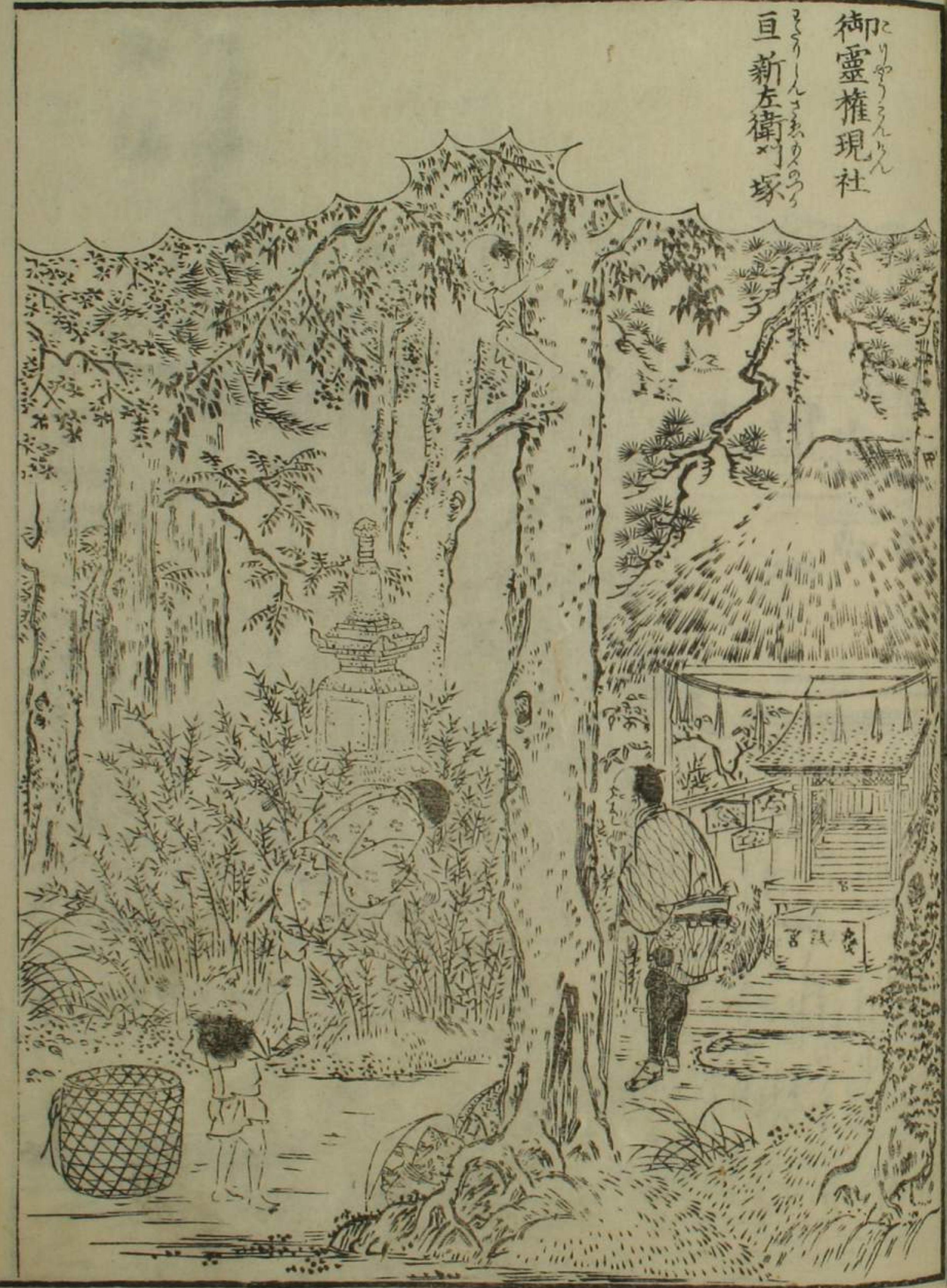
太平記曰越前國足羽合戦の条下軍散る後氏家
中務丞と云尾張守高桂越前の前は参て重國藤島に
新田敵の一族と云き敵を討く首を取て作給へ
誰とも名乗作らば名字をハ知作らば馬物具の様相

順に兵どもの尸骸を見え腹をきり討死を仕作し
何様尋常の葉武者あてをあしと覺く作是を其死
人の膚は懸る作の護めく血を未あはぬ
首は土の著る金襴の守を副て出たり尾張守
此首を能く見給ひある不思後や世は新田左中將の
顔つゝ似し所あるや若れあは左の眉は上に
矢の疵有し自鬢櫛を以て髪を搔あけ血を
洗き土をあり落し是を見給ふ果し左の眉の
上は疵の跡あり是は弥心付て帯る二振の太刀をハ取
寄るに給ふ金銀を延く作らば一振あは銀を以
金膝纏の上は鬼切と云文字を沈く一振あは金を以
銀脛巾の上は鬼丸と云文字を入らる是ハ共は源氏重
代の重宝めく義貞の方は傳ると聞ゆれハ未く一族

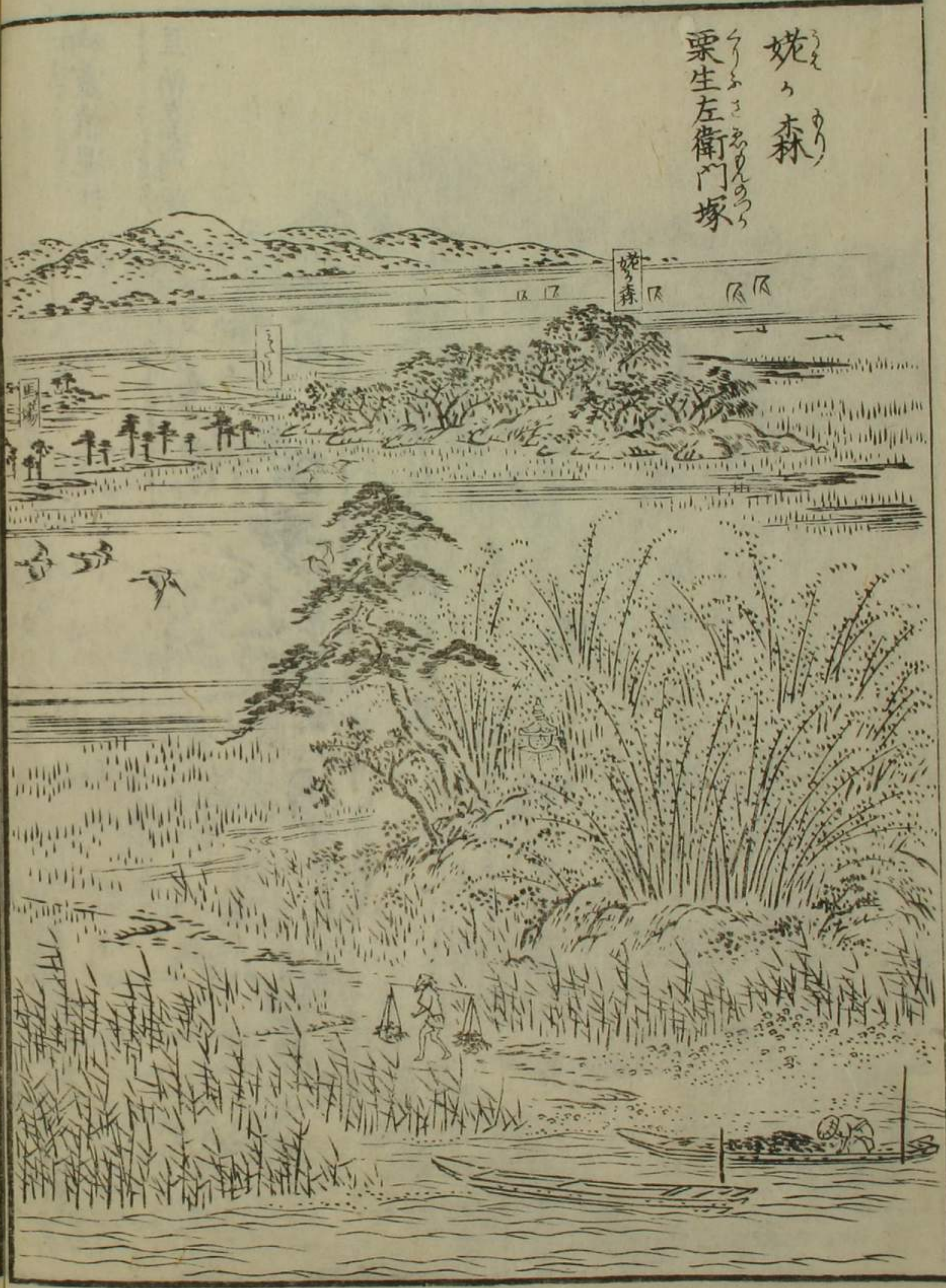
共の帯へそと太刀あち非をそるふ弥怪るれ八層の守と
 開くくくん給ふ吉野の帝は御宸筆も朝敵征伐之
 事最慮所向偏在義貞武功選味求他可運早速之計
 略者也と遊されそを扱ハ義貞の首は相違なるもなり
 とく尸骸を奠よ衆せ時衆八人は昇せき葬礼のあり
 往生院へ送られ首を八朱の唐櫃よ入氏家中務を副く
 潜よ京都へ上せられたり云云

新田山成就院 聖無動寺と号は同所一丁半南の方同一
 側よあり新田大明神の別當寺也新義の真言宗
 六郷の宝幢院は属せり本寺不動明王弘法大師の作
 也之義貞公護持の靈像なりとの
 今別堂を建て感徳堂と
 左の坊相傳義貞公入間川陣を布ゆ頃二童子の枕上り
 立ゆひ篋倉退治の心願あり八豆田の里に安置しなる所の

御靈権現社
 巨新左衛門塚



姥ヶ森
栗生左衛門塚



不動尊と崇信せよとなり依る義貞公此靈像は誓願を

こめく竟は高時を討とていふといふ

巨新左衛門尉早勝居住旧址同所門前半町あまり西の方道

あり左はあり此地ハ元弘の頃巨新左衛門の采邑ありて則此

地は住しつゝとふ早勝没するの後も里民其旧恩を忘れず

一祠を營建し早勝の霊を鎮く神靈推現也

崇敬を傍は早勝の墳墓あり高と三尺計此石乃

層塔なり

姥ヶ森 成就院より七八町計南の方海濱あり堀の内

山王の旅所あり西の方へ續き馬場の形を存す土人義貞寄附の

馬場なりと云ふ洗池ハ森の中

栗生左衛門尉忠良塚 同姥ヶ森ありハ五丁計西の方海濱に

臨む方八間斗竹藪の中は有り五輪の石塔あり相傳ふ

文宇剥落せり

忠良卒ののち後早勝朋友の信を以て其靈骨を此地に
埋藏し塚を築くことあり

瑞龍山宗参寺 河崎驛砂子町の右側の向あり 洞家の禪

刹中未吉の宝泉寺に属を本寺釋迦如来八座像ありて

一尺五寸計の唐佛なり 居士ハ文殊普賢の本像に

作者詳あり 當寺ハ藥師の別當寺あり 相傳ハ當寺を

佐々木四郎高綱の香花院ありて頃ハ砂子一邑悉く當寺に

食地ありて 洞山ハ臨室玄統和尚と号昔ハ濟家の

禪林あり鎌倉の建長寺に属せしと云 遙の後天正に至る

小田原北条家の功臣間宮豊前守信盛と云 永祿二年小田

郡小津入西郡富屋三浦元文珠坊知行の地ありて六百九十八貫百七二文の

地を領する 佐々木四郎高綱ハ速裔なりハ寺境方八丁と寄

附未吉邑宝泉寺四代の住持自山長老を請て當寺の中

奥洞山と曹洞宗に改む 信盛法名を瑞榮院殿雲谷

宗三大居士と号を其石塔ハ當寺佛殿の後の方银杏樹の

下に存 川崎小田村ありて寺領の地と寄附せしと云

按當寺什物元祿四年辛未正月間宮家寺領寄附状ハ間宮豊前守

信盛法名宗三といふとあり又當寺開基の墓碑中ハ雲谷宗参居士佐々木

前豊前守入道源康信と鐫つてありて 信盛の法名と宗三ハ作康信の

法名と宗参ハ作猶疑ハ然れども寺号を宗参寺と稱し又康信ハ當

寺の開基といふ味も康信の法名ハ宗参なりと疑無きふに似たり

高綱獲持の本寺ハ如意輪觀音の本佛ありて座像一尺五寸

ありて作者詳あり別堂ハ安んて本堂の左あり

海榮山養光寺 宗参寺あり四丁斗先の方砂子町の道あり左側ハ

あり洞家の禪宗ありて宗参寺に属を指月和尚開創の寺院

あり本寺藥師如来の座像二尺五寸計あり 延暦六年丁卯の

と云 此地の海中より出現しありて 土人ハ云此地昔ハ

廣の砂子を集めて其上に安置せしあり砂子と云る地名發せりと此靈像

昔ハ宗参寺の本寺なりと云後當寺に遷せしと云

河崎
宗三寺
養光寺
佐々木宮



佐々木明神社 養光寺の境内本堂の右に並べし此地の鎮守
なり宗参寺より奉祀を祭神近江の佐々木明神は相
しきとりの相殿は高綱の靈を崇むるとぞお傳へ高綱
鎌倉右大将家の命を蒙り此河崎の地は山王宮 堀内
建立の地なりあり一りハ其縁を採り間宮信盛先靈の
神徳を追慕し江州の本祠を摸し此地は當社を創
立せしと云九月十九日を以て祭日とす

勝福寺舊址 其廢跡今知らず然る南徳望陀郡奈良
輪邑の東坂戸市場と号する地は坂戸明神と稱す
社あり其社前は一口の梵鐘を懸る銘は武州河崎庄内
勝福寺とあり弘長三年癸亥二月八日大檀那 禪定
比丘十阿及び壹岐守泰綱等名を注せり按は乱世の
頃陣鐘杯は棄れ取られしより其地ハあるあるんを

按は東鑑文應二年辛酉此年二月改元あり弘長を号す五月十三日
甲戌今日書番の副廣濟所はあつて佐々木泰綱前司泰綱と高綱
太郎右衛門尉武重と口論は及ふと云然る時鐘の銘は泰綱とあり
東鑑は記を所の壹岐前司のうなすし此泰綱ハ四郎高綱の甥なり
信綱ハ二男なり

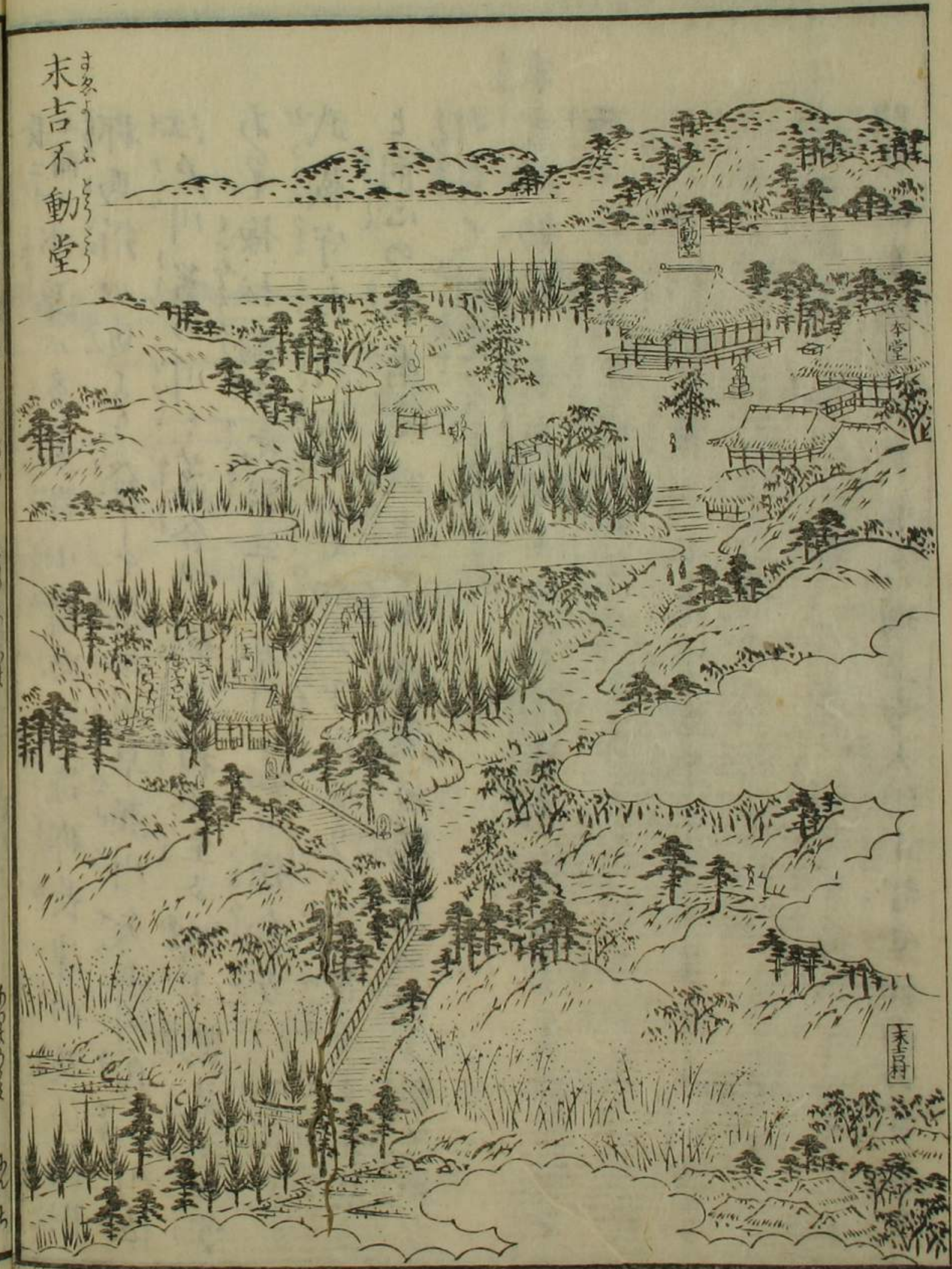
觀音堂 市場村街道より左の方一心山專念寺なり浄
刹は安置せり本尊千手大悲の像を寛朝の作清丈四寸
あり紫式部の念持佛なりと云傳へ兼應年間近江
國石山觀音の迎は老嫗一人住り或時西國杉脚の僧
愚藏坊照西といひ沙門此老嫗は宿せし夜老嫗の
病惱を救ふを報とす此靈像を授く後故あり當
寺は安置なり其寺とては毎月十七日中を集詣の人多し
本堂は掲る所は額は一信心山と書せしを縁山前大僧正
雲外の筆なり
鶴見川 海道は架す所の橋の号は又鶴見橋と号す

市場観音



長二十
七間 水源ハ多磨郡小野路都筑郡長津田及ひ橋樹
郡馬絹の辺より發して恩田川早瀬川矢上川鳥山川佐
江戸川等の川々落合ひ鶴見村に至る故に鶴見川の号
あり梅松論小元弘三年五月十四日鎌倉方討ふとく
武蔵守貞将大御前向ふ下総よりハ千葉介貞胤義貞
と同心の義有と攻上る間武蔵の鶴見の辺に於て戦ひ
打負て引退くとあり
末吉不動堂 末吉村にあり鶴見邑海道より七七町斗
西にあり明王山不動院真福寺と号ひ天台宗ありて
品川常行寺に屬を本尊不動明王を安置をその像を
坐像あり六尺餘あり慈覚大師の作といふ本堂ありハ
十一面観音を安んず坐像二尺斗り行基菩薩の作り仁王
門の額真福寺と書せし増上寺大僧正智堂和尚の書あり

末吉不動堂



秋田城介義景旧館地 其地今ある屋々々々東鑑仁治

二年十一月四日 將軍家武藏野開發の法方違と〜と

義景武藏國の鶴見の別莊渡御頗以て壯觀なりとあり

醫王山成願寺 鶴見村の内ふて街道より山手へ入るる三丁

斗よりあり曹洞の禪刹して寺尾天光寺は属本号釋迦

如来より作者詳々にして開山と聲菴聞大和尚より号ま

薬師堂小安より所の薬師座像あり七尺斗り古佛と

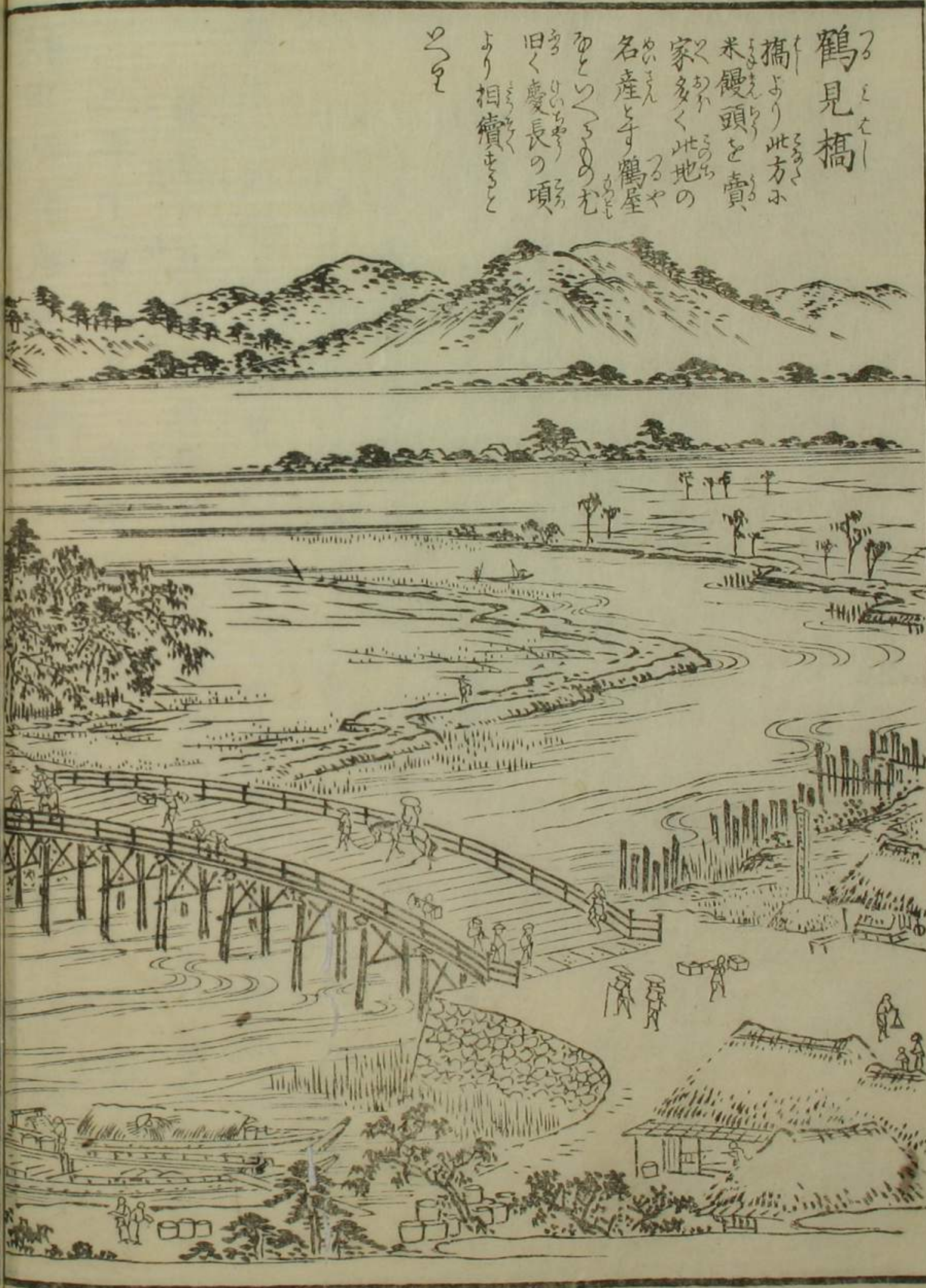
白旗八幡宮 白旗村ふあり義經の靈を鎮る所と云傳ふ別當

と神奈川能満院兼帯以来由と拾遺江戸名所圖會小

詳あり

子安觀世音 子安村海道より右の方比岳あり子生山

東福寺と号は新義の真言宗あり神奈川の金藏

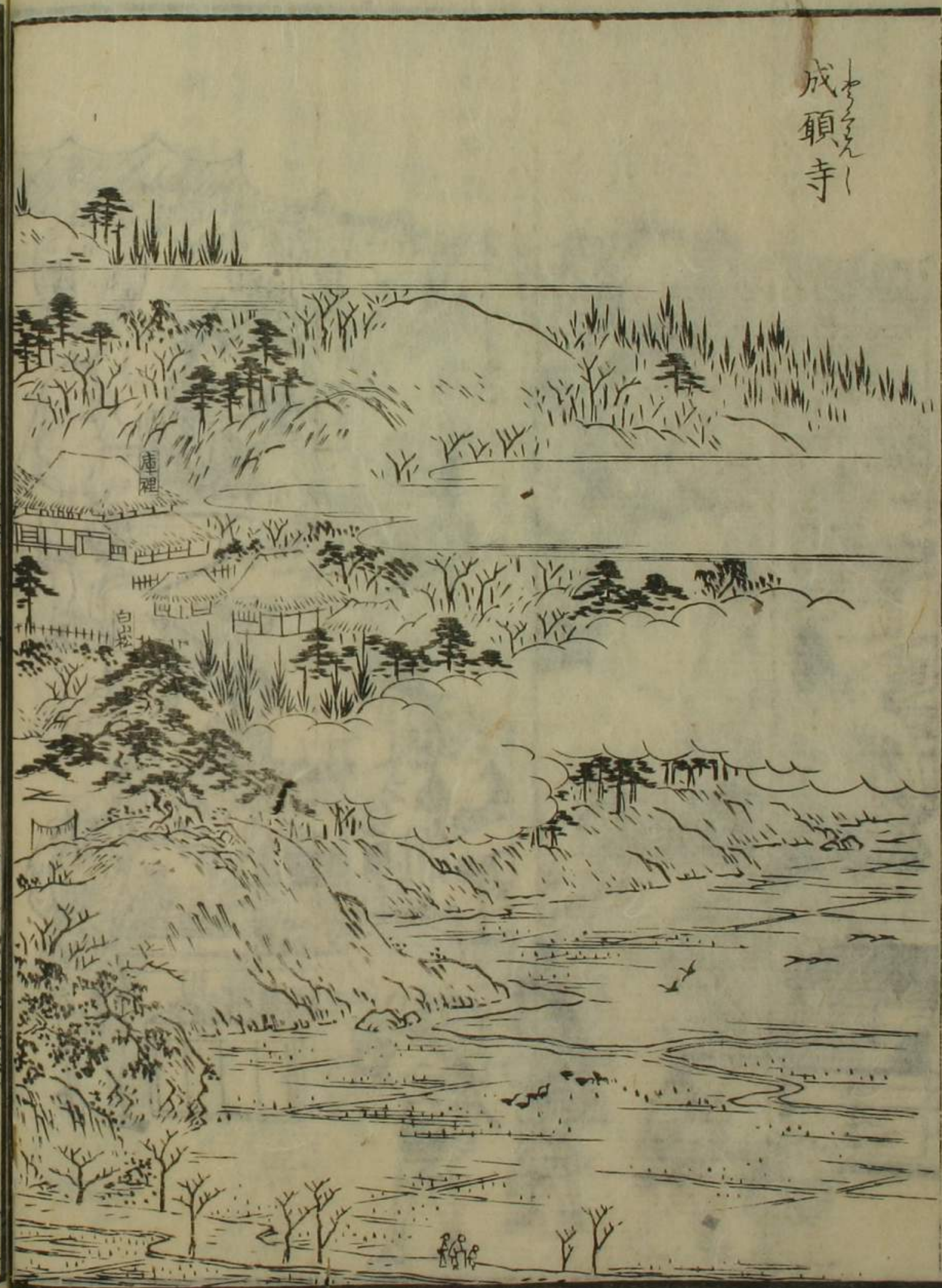


鶴見橋
 橋より此方小
 米饅頭を賣
 家多く此地の
 名産とす鶴屋
 和とつものむ
 旧く慶長の頃
 より相續きと
 ころ

生麥村
あかき茶店

生麥の河崎と
神奈川の間宿を
立場なり此地あり
らきとの水茶屋
享保年間廢
閑きあり梅干を
齋き梅漬の生
姜を商人往来の
今時の繁昌





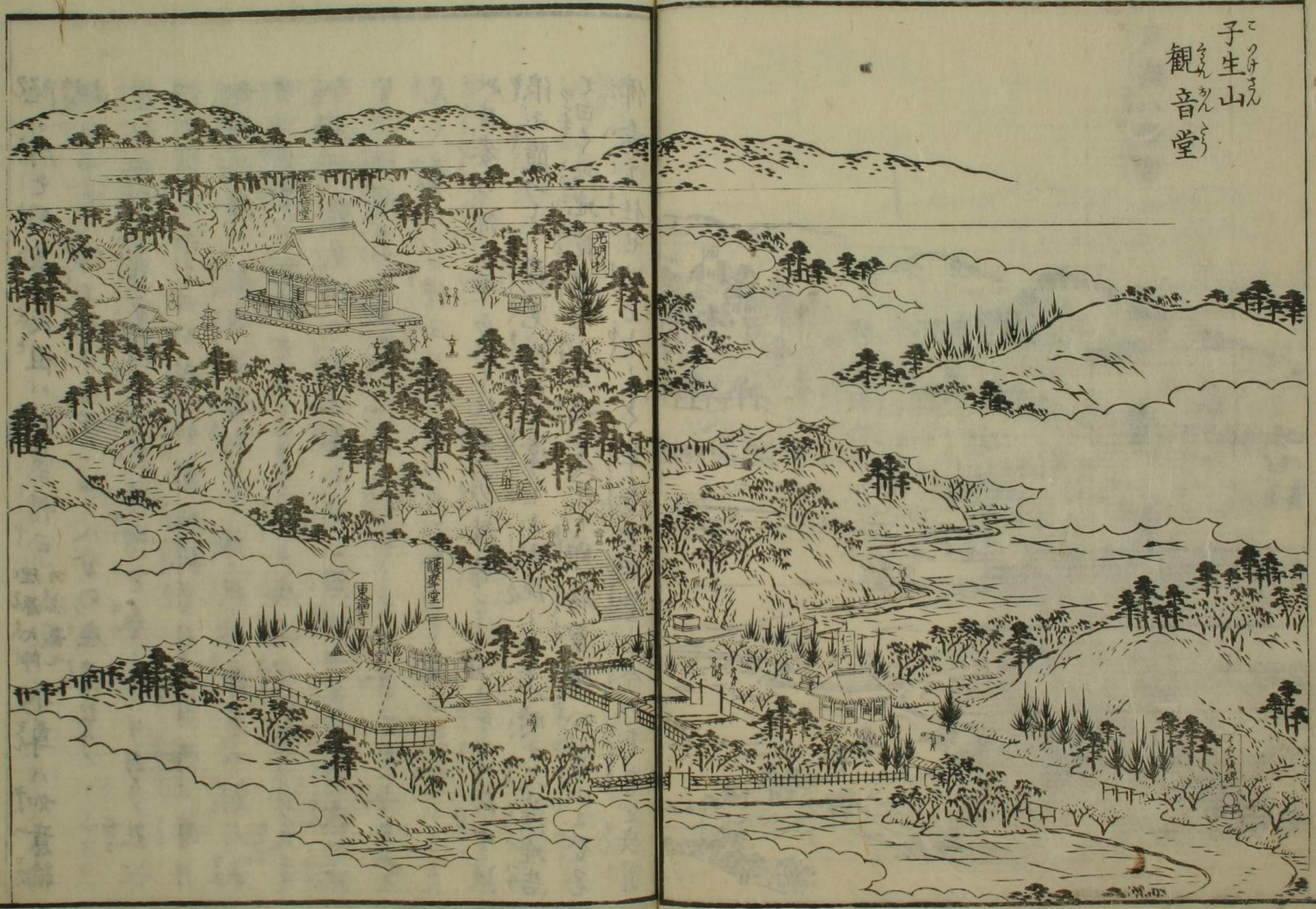
白旗八幡宮



白旗村



子生山
觀音堂



院は屬を開基の大祖ハ勝覚僧正の理源大師本尊ハ如意輪
觀音中々佛工春日の作一寸八分の座像なり

縁起曰往古勝覚僧正一夜異僧を夢みるるあり然に
件の異僧告て曰く我ハ如意輪觀音なり昔佛工春日

和州泊瀬の觀音を彫刻せし序我形像をよ刻し未
世の衆生を利益せよとのたまふ然らば我海中にあるより久し

今武州鶴見川の末生麥の浦ハ漂泊を是我有縁の地
なり汝開東に至る一字を創立し安置せよと告めんと

えんく夢さむ僧正ハ奇異の思ひをか直に旅装しそ
此生麥の浦に至られしに光明赫燦とくなる海中に

浪小随つて勝覚僧正の掌上に出現し時ハ又薩埵告
て曰く此地乾隅の山に安まへし即勝覚僧正當山に登る

佛意に任せ地をトく草舎を経営し今の本を安置
せり時ハ寛治元年三月十八日あり

改む其後稻毛の領主稻毛三郎平重成中稻毛の地其嗣
なりと云 愁と堂宇を修營し諸人供する所の米錢を

乞ふ一年の俸に比し晨昏大士へ禮拜し事を成する
恰も君に給仕するるに三年の後其妻懷妊し明年十月

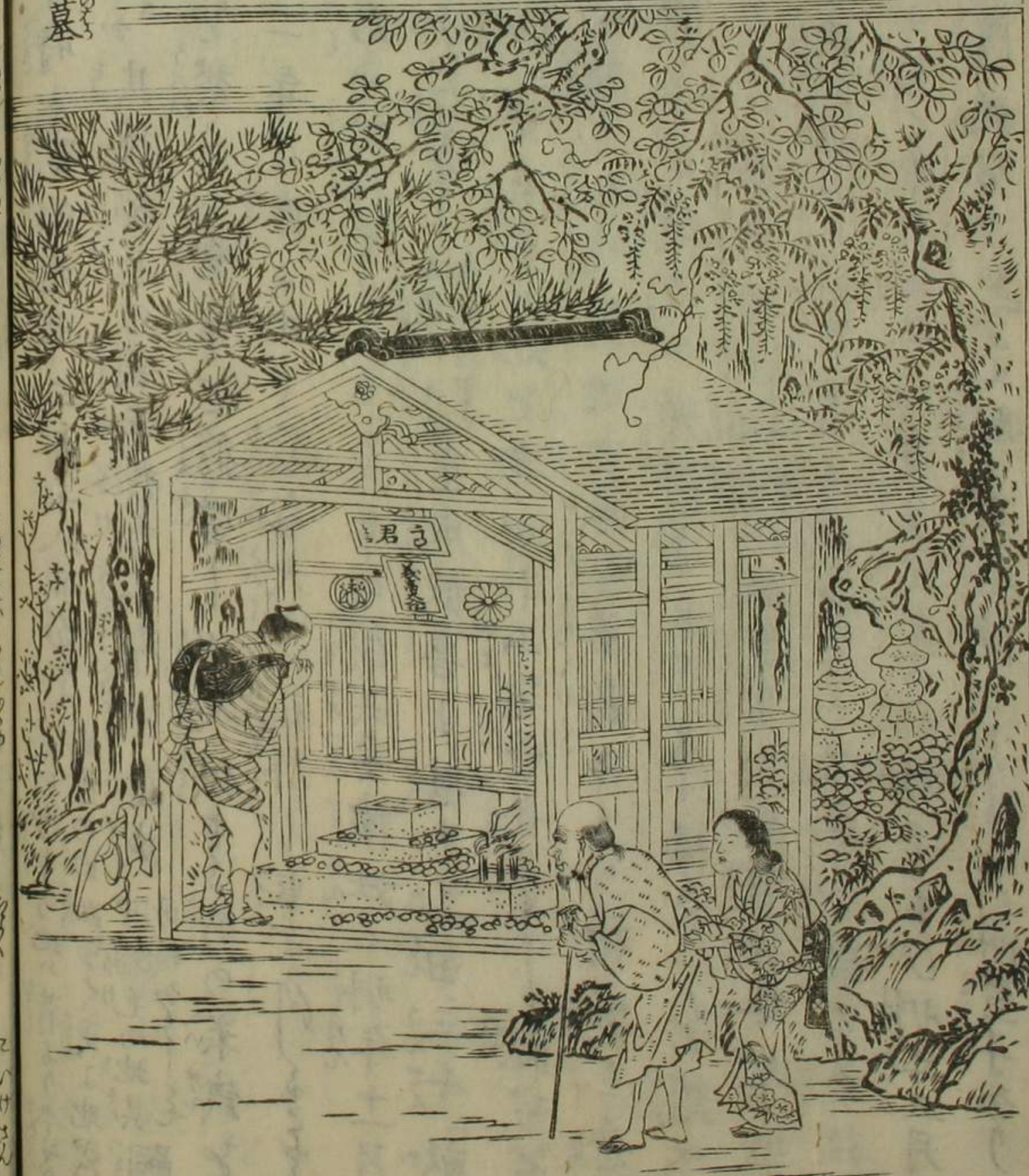
一男子を生むるに左衛門平重成歡喜し堪た美田三千畝
山林方一里有半の地を寄附し山を子安と号し院宇を

植本と稱す爾來薩埵の威力益新に禱賽する者
絡繹とく絶え堀川帝皇子の御を愁へ

依り前大納言藤原道房卿を其御祈願の爲に
當山に詣りて三年の後皇妃に妊むるに明年五月

太子降誕するに則ち鳥羽院となりしハ此皇子なり

義高入道墓



按多鳥羽院ハ康和五年正月十六日
降誕ナリ多り五月ハ誤アリ
帝徽感斜ナリ勅シて子生山

東福寺の号を賜ハ遙の後文龜永正の間東國屢兵戦起リ

頂大ニ衰廢セリとも大悲閣のともを巖然とリしとあり

寺僧云今至聖寄願あり者當寺ハ昔小指一諸人供養所の賽銭を乞年
限を定め本願ニ給仕と稱し誠信ノ祈念ハ諸人供養所の賽銭を乞年
限を定め本願ニ給仕と稱し誠信ノ祈念ハ諸人供養所の賽銭を乞年

仙鶴山松隱寺 東寺尾村ふあり 享保の頃をハ 浄家の禪林に

鎌倉建長寺雲外庵の佛壽禪師開創の古刹あり

禪師ハ建武二年二月十八日寂まとの鎌倉志を文和 本寺釋迦如來ハ

三年二月十八日寂まとの此地ハ雲外庵の米地なり

慈眼堂 松隱寺よりさ 渡一寺丁斗門をゆく小き坂を

下を廻りく二丁半斗岡の上よあり 本寺十一面觀音

佛工春日の作なり小机札所の一ゆき 松隱寺より

兼帶せり

義高入道墓

仁王門の傍古墳の前は石の地蔵を安せし小堂あり軒下と称を後里見と号す小田原の合戦討死せし人ありと云ふ未考此地の農家は平田氏某あり其始祖ハ義高入道の家臣少くありしとあり附て云松徳寺什物の中は建武元年に記せし圖あり人名を注せし中は地頭阿波國守獲小笠原内蔵人太郎入道といふ名ありこゝ阿波の國とあるを安房國の誤か小笠原内蔵人ハ先の義高入道の祖先あるを或ハ又義高の名に附會しこゝ里見を混し交へしもの可考

護國山觀福壽寺

東子安村新宿海道より右の方北山脈あり世俗浦島寺と稱す昔ハ歸國山浦島院といひる由縁起よんえんくも當寺ハ淳和帝の勅願や々々槽尾僧都

開基

本堂 本多聖觀世音菩薩

立像中々中長一尺三寸あり世々浦島の本堂 本多聖觀世音菩薩 觀世音との稱せり寺傳云く當時浦島子蓬壺の蘭臺よりあまの里に走んとするの日神女一箇の玉匣と共に大悲の姿儼とありて曰く子今本土よかたり去らんを乃渡海風波の難を凌ぎ又長生を授けんを授けんとす竟に鳴子ありて歸るを去るの夜むすの國震く浦島靈像と云ふ

浦島明神

社傳云く安永八十歳の時社と稱す毎歲七月七日を祭日此勝海上人の時に至り寛平七年七月七日靈告あり毎歲七月七日を祭日此

龜化大龍女

同本堂あり浦島子海に釣を垂ると龜ありて龍燈の懸りあり

龍燈松

寺の後の方山の頂ありは此樹に今も時として龍燈の懸りあり

目當燈籠

龍燈松の下あり夜中入津の船の便を導く事保の項

菩提樹

此地の農民松井某建立せしと云ふ今も連綿とあり

浦島太郎墓

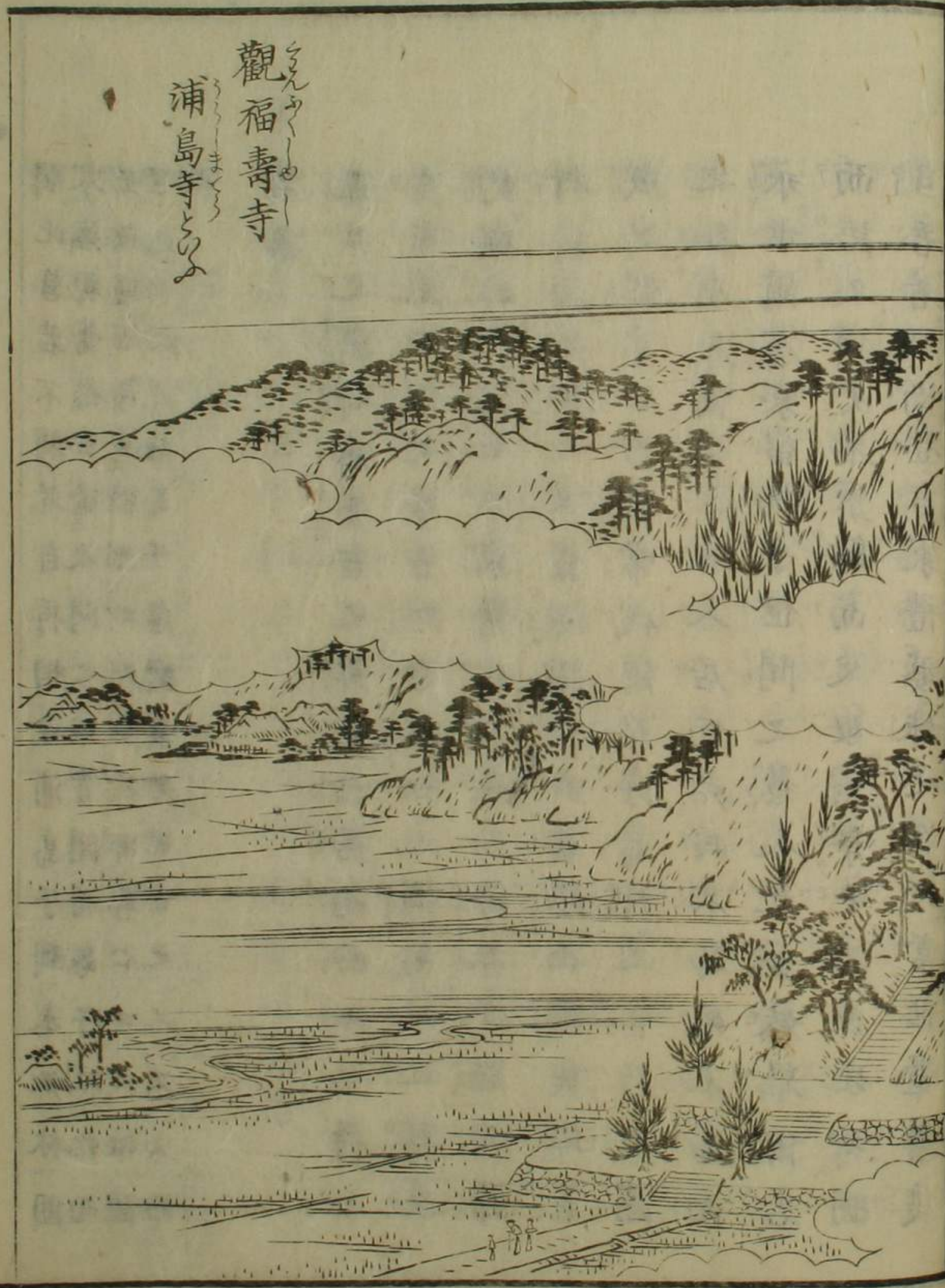
堂前あり島子自建置し同足洗井 道の傍にあり今も里民の用水と

同腰掛石

其跡今もあり

日 本紀略記曰郡雄略天皇二十二年戊午秋七月 月 丹波國餘社郡管川人浦島子感以爲婦相逐 遂 得大龜便化爲女於是浦島子感以爲婦相逐 入 海蓬萊山歷觀仙衆語在天長二年歸郷 本 後紀淳和七年日觀仙衆語在天長二年歸郷 今 三百年十和記年也浦島子到蓬萊居之春 日 計 初暖群鳥和鳴一煙霞難再來婦與一故郷曰慎莫 日 浦島子爲訪親善強催歸駕婦與一故郷曰慎莫

観福壽寺
浦島寺とのみ



開此宮若不開者自再相逢浦島子到本仙鄉而園
零落親舊悉亡逢人問之曰耶那島中人不大帷而去
去漸過百年爰帳然如失步於耶那島之心人去帷而
死匣見之於是浦島子忽變衰老皓白之人不去帷而

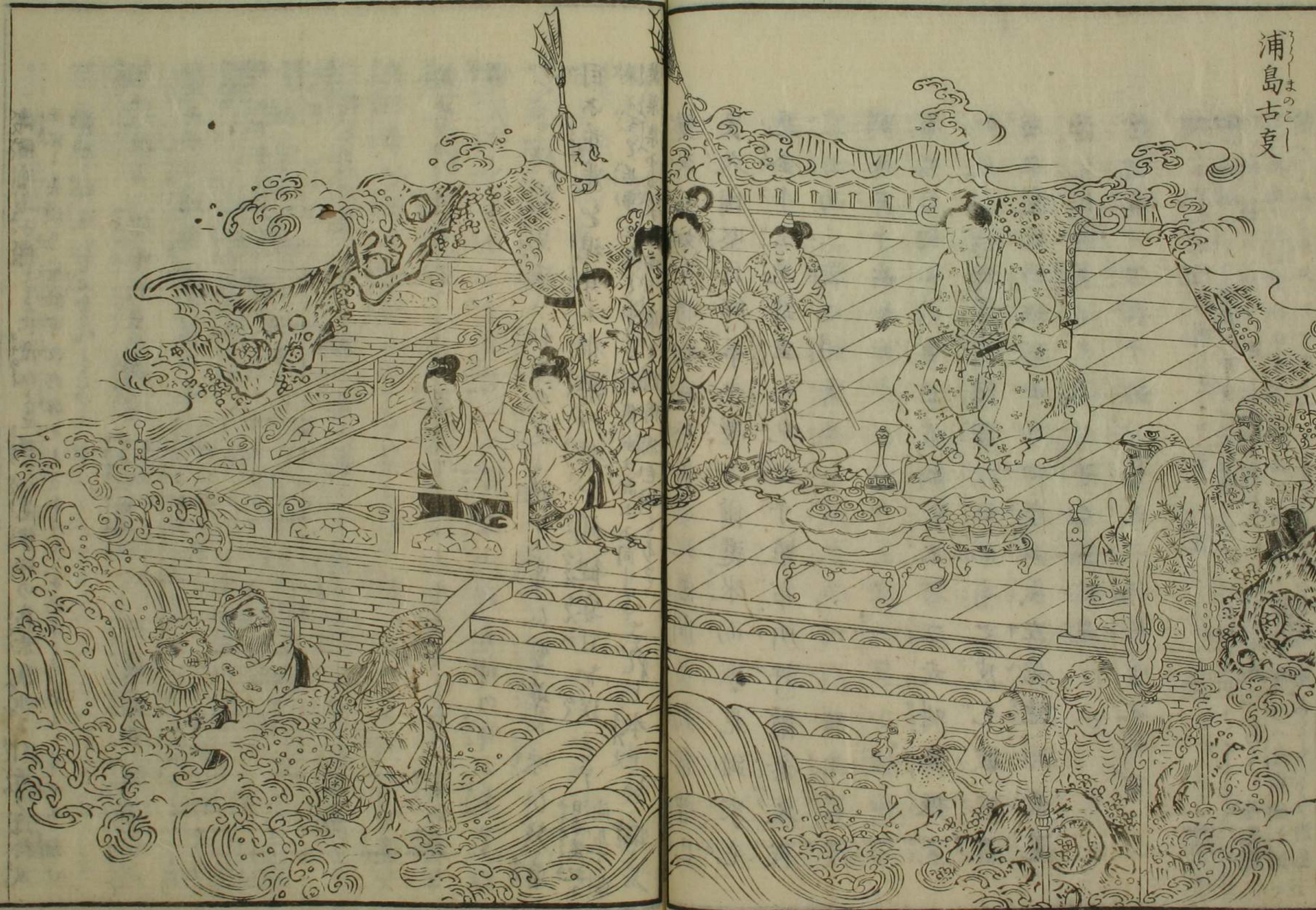
萬葉集

春日之霞時爾墨吉之岸爾出居而釣船之得乎
良布見者古之事曾所念水江之浦島兒之堅魚
釣鯛釣矜及七日家爾毛不來而海界乎過而擄
行爾海若神之女爾避爾伊許藝趨相訛良比言
成之賀婆加吉結常代爾至海若神之宮乃內隔
之細有殿爾攜二人入居而老目不為死不為而
永世爾有家留物乎世間之愚人之吾妹兒爾告
而語久須史者家歸而父母爾事毛告良比如明
日吾者來南登言家禮婆妹之答久常世邊爾復

變來而如今將相跡奈良婆此匿開勿勤常曾已
良久爾堅目師事乎墨吉爾還來而家見跡家毛
見金手里見跡里毛見金手帷常所許爾念久從
家出而三歲之間爾墻毛無家滅目八跡此莒乎
開而見手齒如來本家者將有登玉篋小披爾白
雲之自箱出而常世邊棚引去者立走叫袖振反
側足受利四管頓情潰失奴若若有之皮毛皺奴黑
有之髮毛白斑奴由奈由奈波氣左倍絶而後遂
壽死祁流水江之浦島子之家地見
常世邊可住物乎劔刀己之心柄於曾也是君

按日本紀丹波國とすは丹後國より前あり丹後國
紀元明天皇の和銅六年夏四月乙未丹波國五郡を割て丹後國
置とあり夫れ後與社郡丹後は屬せし其地の書皆こゝに丹後國
丹後風土記和名抄扶桑略記の類ひ與謝は作る又管川丹後風土記
管川は作る水江日本紀水江とて萬葉集や或ハ墨吉とも書り浦島子

浦島古変



傳續浦島子傳とくに澄江を按小仙覺律師の萬葉集抄より所の丹後風
土記美頭乃睿能宇良志麻之占とありくもてふものえと水澄此
義あり通して云あり

相傳往古 雄略天皇の御宇 日本紀雄略記二十二 年戊午七月とあり 丹後國與謝郡管川

の人小水江浦島子といふあり 寺記云相州三浦住人水江浦島太夫といふもの

或ハ太郎をせり續浦島子傳浦島子何もの人ありと云古書浦島子と作る寺記の太夫

或ハ太郎をせり續浦島子傳浦島子何もの人ありと云古書浦島子と作る寺記の太夫

一時七月の事なる小獨小舟に乗し海上下釣し靈龜を得たり

其形勢を見小尋常はありしれハ恠とあひ且何舊て是と

放中り以決辰ありく彼龜化し一人の美女とあり前の恩と

報んとく島子くもと携へて蓬萊山海若神の都に至るぬ

かくら後浦島子ハ仙室の筵に侍り常に靈藥の味ひ成嘗

目小花麗を視見小雅樂の樂を聞觀宴日を送る 日本後記小

心起り獨二親を意ぢ小神女小此を告ぐれハ神女ハ島子

別を意慕くとも竟止るき色も見え絲ハかひなく

一箇の玉匣を與へく云く子遂小賤妾と遺れをく再ハ

此神仙境へ来らんとありハ必此匣の裏を開き見たりありれと

島子そを約しとり事外喜ひ彼匣を受傳へて

分ち辞し去る頓蓬嶺の仙都をゆるくととへハとと與謝の

舊里小飯を着ぬ 日本後記云浦島子天長二年郷小歸る今に至る三百四十

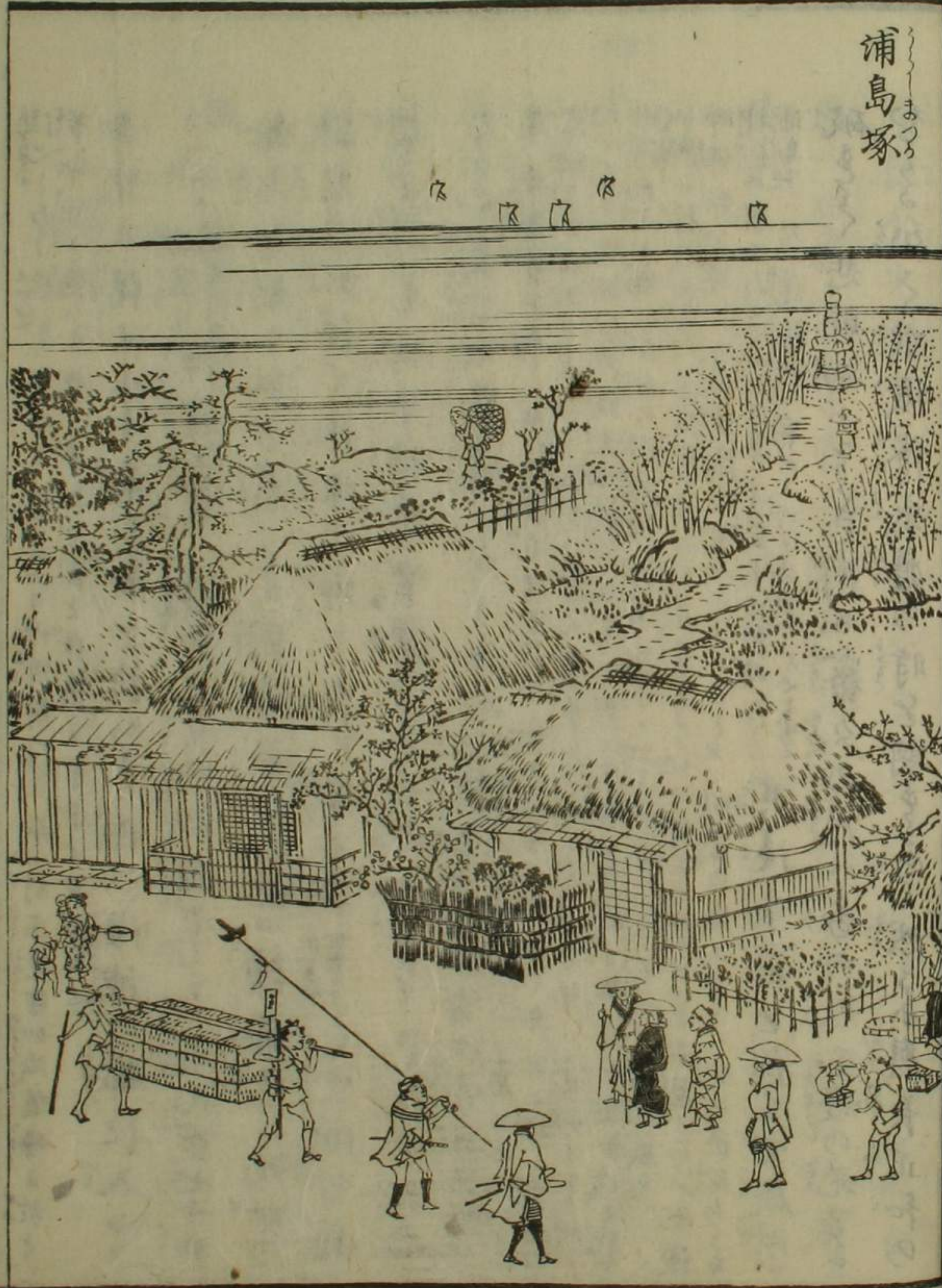
三十三代を送る水鏡云雄略天皇廿三年と七月浦島子蓬萊へゆると云

岳ハ改く江海となる荒蕪の間色煙を絶え舊塘寂寞とて

道路跡ぬしゆくありし人さなるれハかハ惟しみ

かの驚き郷人小旧俗の行方を問ふ一人の翁答へく云く昔聞

浦島塚



水江の浦島子といふもの釣と好し舟小乗し海を遊ひ永く
 家小婦のそとつとちとて幾數百歳を経るもとありをせ
 續浦島子傳はるる衣と洗ふの老嫗小あり旧里の古人を問嫗答へ
 我年百有七歳と云く島子の名を尋ね祖父母の世古老口傳して數百
 歳を經るの傳來語は云く昔水江浦島子といふ者あり釣を好し舟小乗し
 浦島子傳はるる衣と洗ふの老嫗小あり旧里の古人を問嫗答へ
 後記云く遂に浦島子仙化す蓋海中に入り幾數百歳を經るもとあり
 遙小隔る舊里の遷變せしむを悲歎し又仙遊の未央を想
 像く悲意は堪も前の誓ひを忘れく忽小玉匣を開き
 裡より紫雲ゆく蓬城とくく駿驟とくく去るの時に
 其形容忽然とくく衰老皓白の人と變を云云 絶而後遂壽死
 和流水江之浦島子家地見云云丹後風土記も島子俄小老翁とあり遂小死
 時天長二年八月廿二日仙遊再會の期と失ひ紅流行白鬢と濕り舟誠萬緒
 宮と其後金梁の鳴玉液と飲紫霞と餐青粉と服頸鶴と延立く蓬小
 齋海の蓬嶺神鳳の馳と望と時と遠く仙洞の芳流と瀾と巖何と飛遊し
 海浦の隠論し遂小後とあり後代地仙と号し所謂浦島子傳古賢撰
 記せし言不板且始小兼平二年壬辰四月廿二日仙遊再會の期と失ひ紅流行白鬢と濕り舟誠萬緒
 記せし言不板且始小兼平二年壬辰四月廿二日仙遊再會の期と失ひ紅流行白鬢と濕り舟誠萬緒

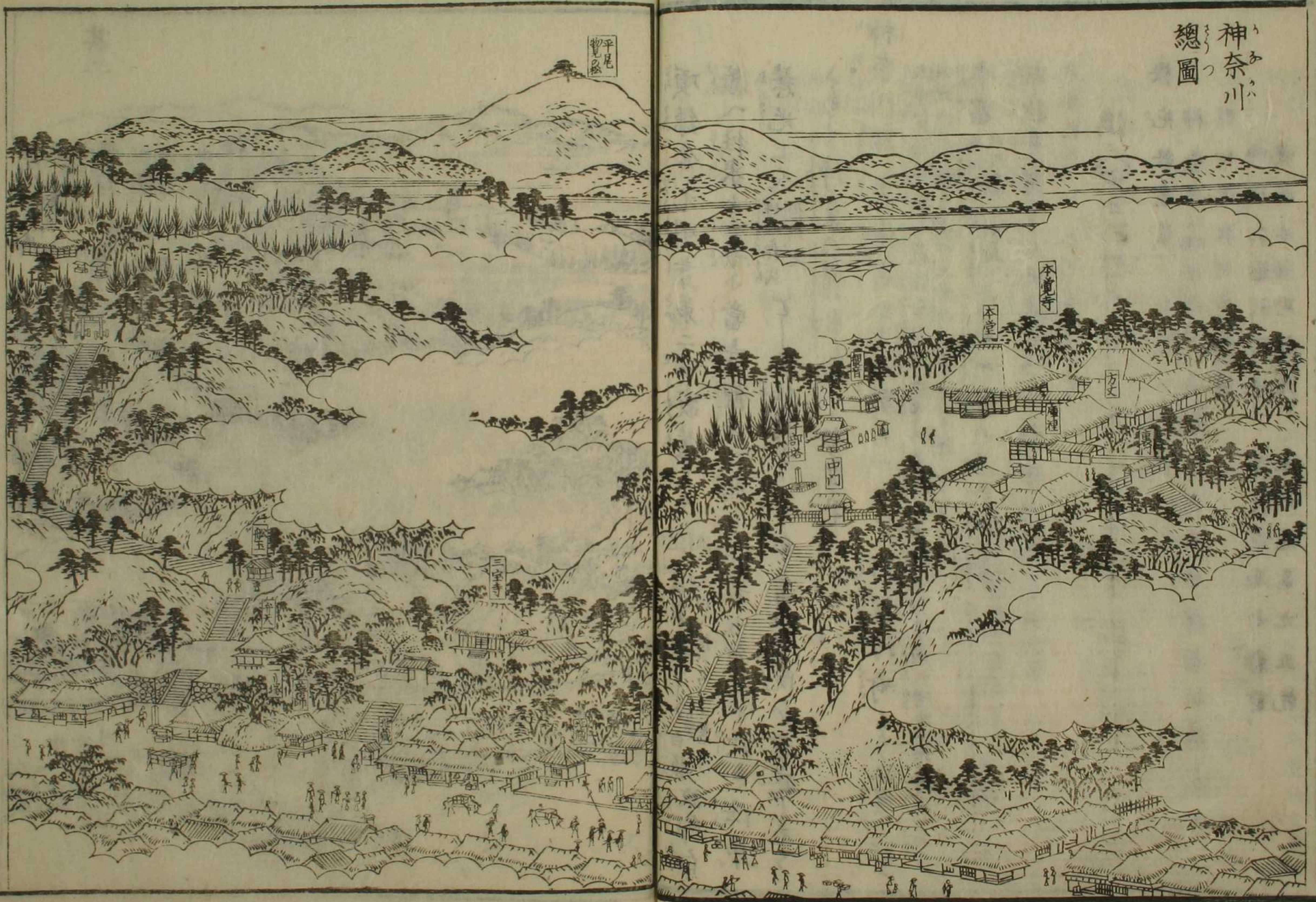
命命... 永仁二年甲午八月廿四日丹州筒川庄福田村室蓮寺如法道場... 寺記云後又八十歳の齡を持ちて再び海神の都に入... 諸書の抑當寺ハ淳和天皇の勅願... 九年を歴る古藍... 同帝弟四の妃ハ浦島子九世の孫なり妃深く佛乘に帰... 帝小告... 梨小計... 梶尾僧都實慧と... 是を司り... 元亨釋書云如意法尼ハ丹後國余... 年帝聖夢と感... 後花使と... 妃と... 意論... 大平... 雨澤天下... 仙傳... 師佛... 神... 浦島子... 破... 仍... 唯機縁感應の時と期... のと然... 小應長正和の

項鎌倉光明寺弟二世寂慧上人
記主の家系... 故郷白
 簷へ往来... 每小當寺觀音へ詣... 守者も... 歎き法弟
 慧光上人 姓大森氏 相州人 とく住持... め二度寺院と營建...
 浄業の精舎とせ...

神奈川驛 東海道五十三驛の一... 行程河崎より二里半...
大平記梅花... 此地の名義...
 本宿 新町... 西の町... 青木町等の名あり... 又臺...
 向井澤と云地... 神奈川驛と云...
 平安記行...
 海人... 持資

梅 花無盡蔵 文明十七年己巳
 神奈河 春出世戸井赴 江戸途中有老松蟠屈其
 形如竜 其処号鴉森
 神奈 氏麿 松屋連 深泥没馬打難前
 鴉森 春動 卧松老 未入飛竜九五乾

神奈川
總圖



平尾
物産

本堂

本堂

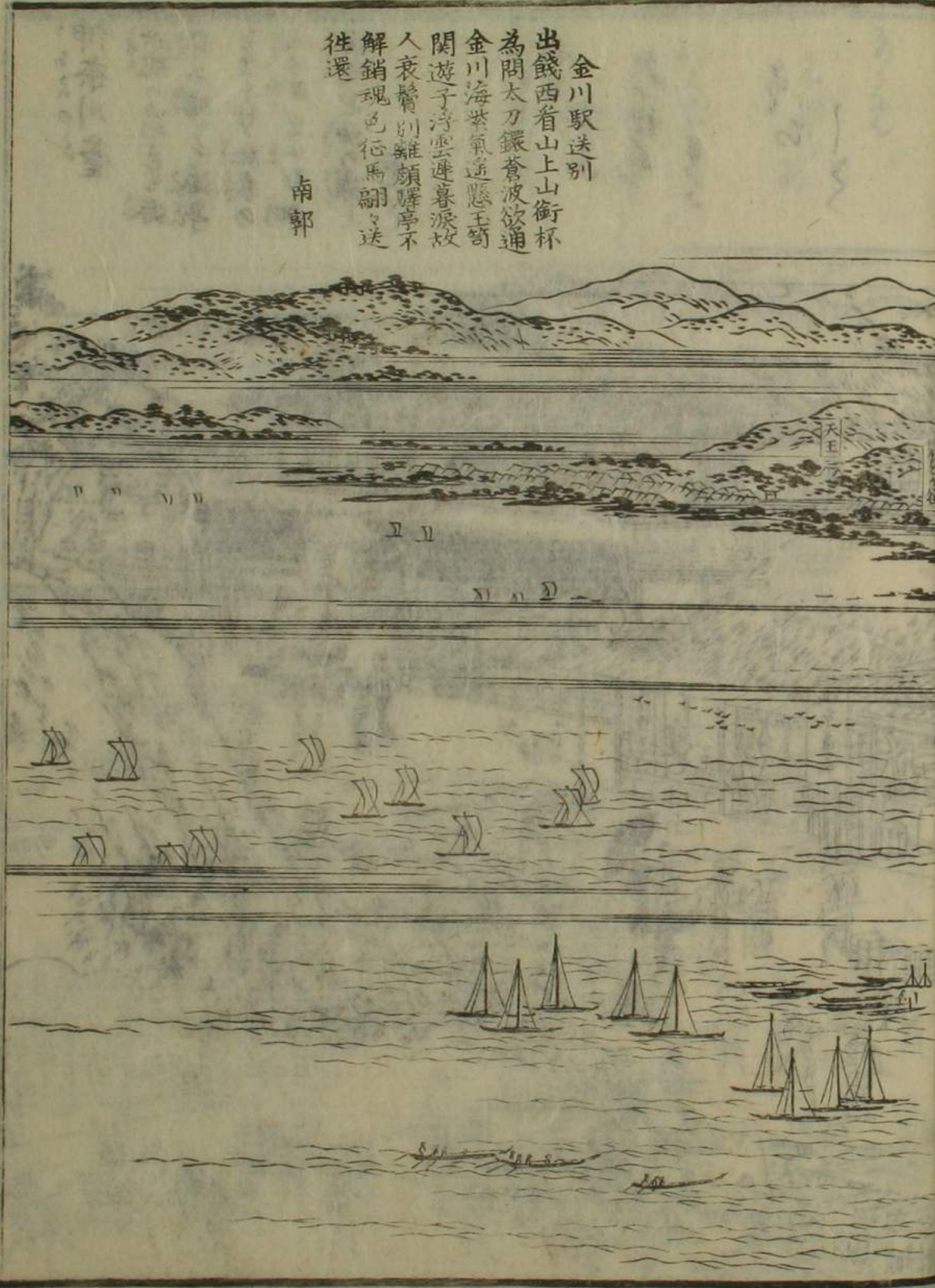
三ツ石

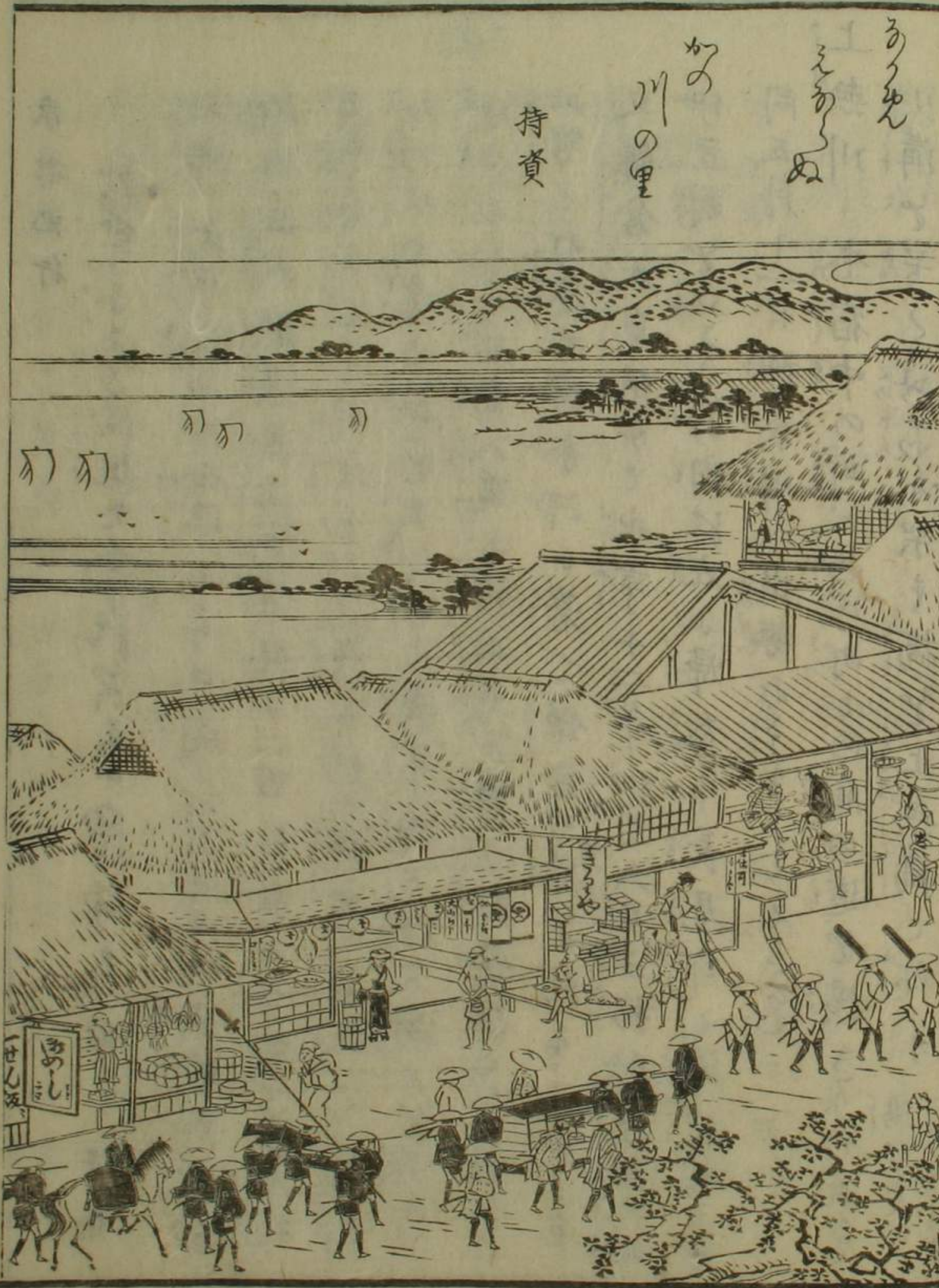




金川駅送別
出錢西看山上山街杯
為問太刀鏢蒼波欲通
金川海峽氣逆懸玉寄
閑遊子詩雲避暮淚故
人衰鬢別離頻驛亭不
解銷魂色征馬翻送
往還

南郭





持資

川の里

あつち
えあぬ



神奈川臺

此地はのりも海
岸に臨み海亭
をまうけ往来の
人の足を止む此
海辺を袖の浦と
名づく

平安記行

あつち
あつち
あつち

あつち
あつち

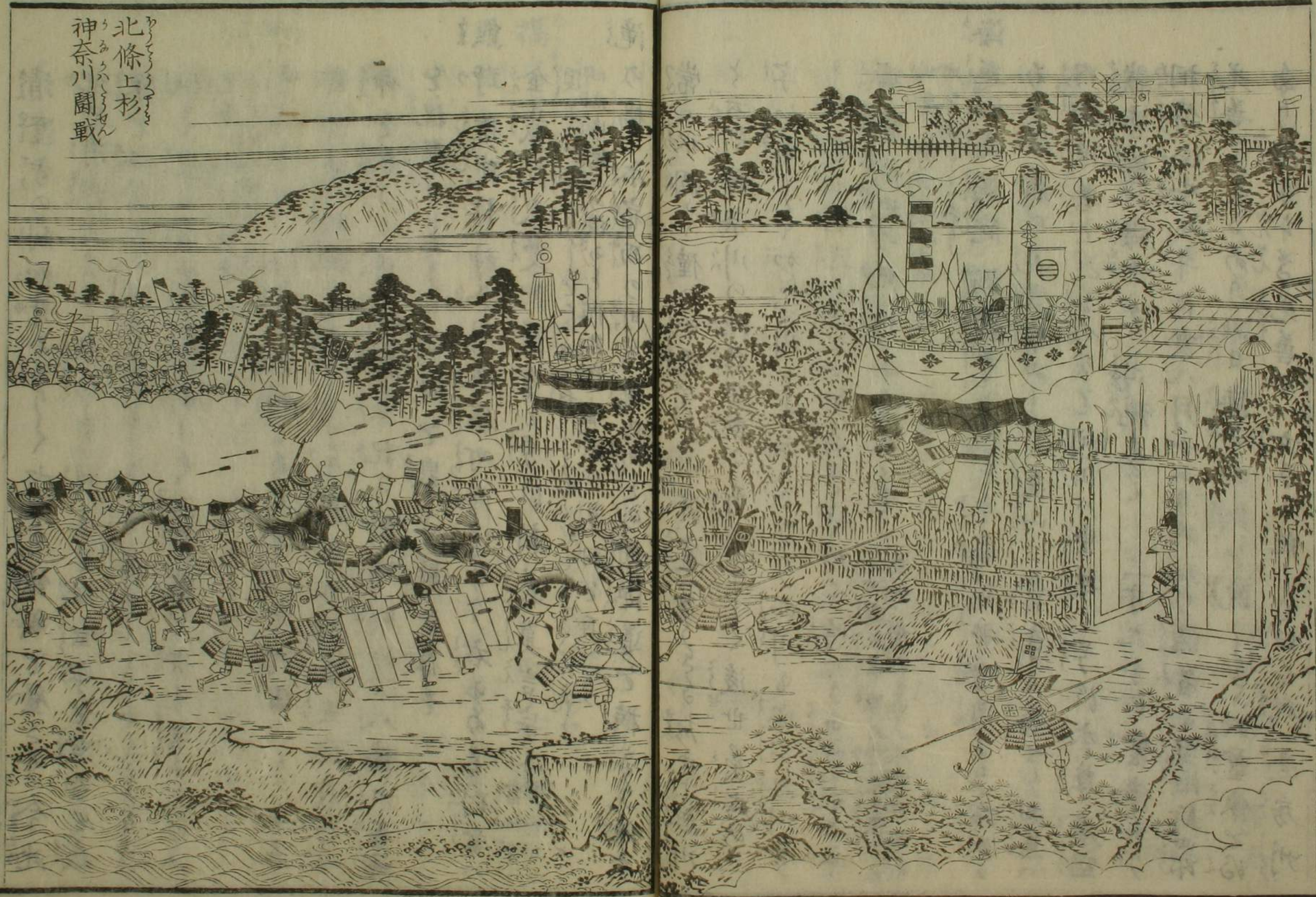
浮世を渡る流波を人をもたぬのふ小舟を舟といひぬ

澤庵

此地ハ大平記ゆも正平七年の閏二月廿日の武蔵野合戦ハ
 新田義興服屋義治兄弟終ニ二百餘騎ヲ打たされ落行
 左馬及小逢々命ヲ失ひ夜半過リ程ニ開戸ヲ過ル
 途中ヨリ石堂入道三浦助等ノ甥ニ行逢ひあひ馳
 此勢ト打連テ神奈河ニ著テ鎌倉ノ様ヲ問ふ由
 又鎌倉大草紙ゆも永享十二年四月六日上杉修理大夫持朝
 伊豆國ニ立ル山ノ内此庄ニ歸恭一長尾郷ニ滞留セし
 同五月十一日神奈川へ出勢ありし由
 上無川 本宿中の町と西の町との間の道を横きりて流る
 小溝と号く此所ニ架き橋を上無橋と稱す 橋の長さ
 常ハ水涸く僅の小流なり水源定ならず其上無川
 と云則神奈川の地名の興る所以也後世災志の二
 字を略し々々糸川と云るなり品川も亦下無川
 是も毛志の二字を省き々々呼る由寛永五年
 齊藤徳元の紀終ふもえあり
 小田原北条家の分限帳
 知野彦六といふ人武州神奈

海運山能満院満願寺と号す本宿荒井町道あり右側
 あり古義の真言宗ゆも鳥山三會寺ニ属せり開基ハ
 内海光善といふ人なり開山ハ重運と号す本尊虚空
 蔵菩薩ハ海中より出現ありし三寸九分の靈像あり
 相傳正安元年己亥八月十三日此地の漁者ニ内海新四郎
 光善といふあり此日海中ニ網を沈し此靈像を
 あり然るに光善の女子ニ托して曰く我ハ是房州

北條上杉
神奈川闘戦



清澄寺の關伽井あり七百有餘歳を歴つり今此地の有縁あり移り汝堂宇を營む我像を安置せよ必子孫を幸福ありと云り依り直に當寺を開創して此靈像を安んずるといふ

洲

崎明神祠 海道の右側あり普門寺別當より安房

國

洲崎明神は同くを房徳志料ふ天比理乃咩

命

を祭ると源平盛衰記は洲崎明神ハ八幡大菩薩

と祝

をせるとありハ兩説を擧ぐ疑と存せ

熊

野権現社神奈川本宿町海道より右あり別當ハ

金藏院東曼陀羅寺と号し新義真言宗之

權現山の頂に勸請あり此地に移り草祠を再せり

滝

の橋本宿西の町と滝の町との間海道を横きり流る

川は架を此橋下の流を滝の川と号し故あり水源を

七八町西の方堰村と云り祭まゝの流あり

橋

本宗興寺橋より向ふ川添子町あり西の方道あり

左あり曹洞の禪宗より同所本覺寺は屬せり

本寺釋迦如来の作あり一尺あり此座像あり

堂前の清泉ハ寛永年間

大將軍家御上洛の時此地本宿小湊旅館を儲せられ

一頃沙茶の水小掬せられと云

觀

音山山頂小觀音堂あり故は山の号とせり宗興寺あり

今も石燈尊立し寺は總門の正中に對し

本尊正觀音の像ハ毘首羯摩天の作あり五寸九分

あり昔焼亡ありその旧記を失ひぬ今其来由とあり

とといふ

洲崎明神

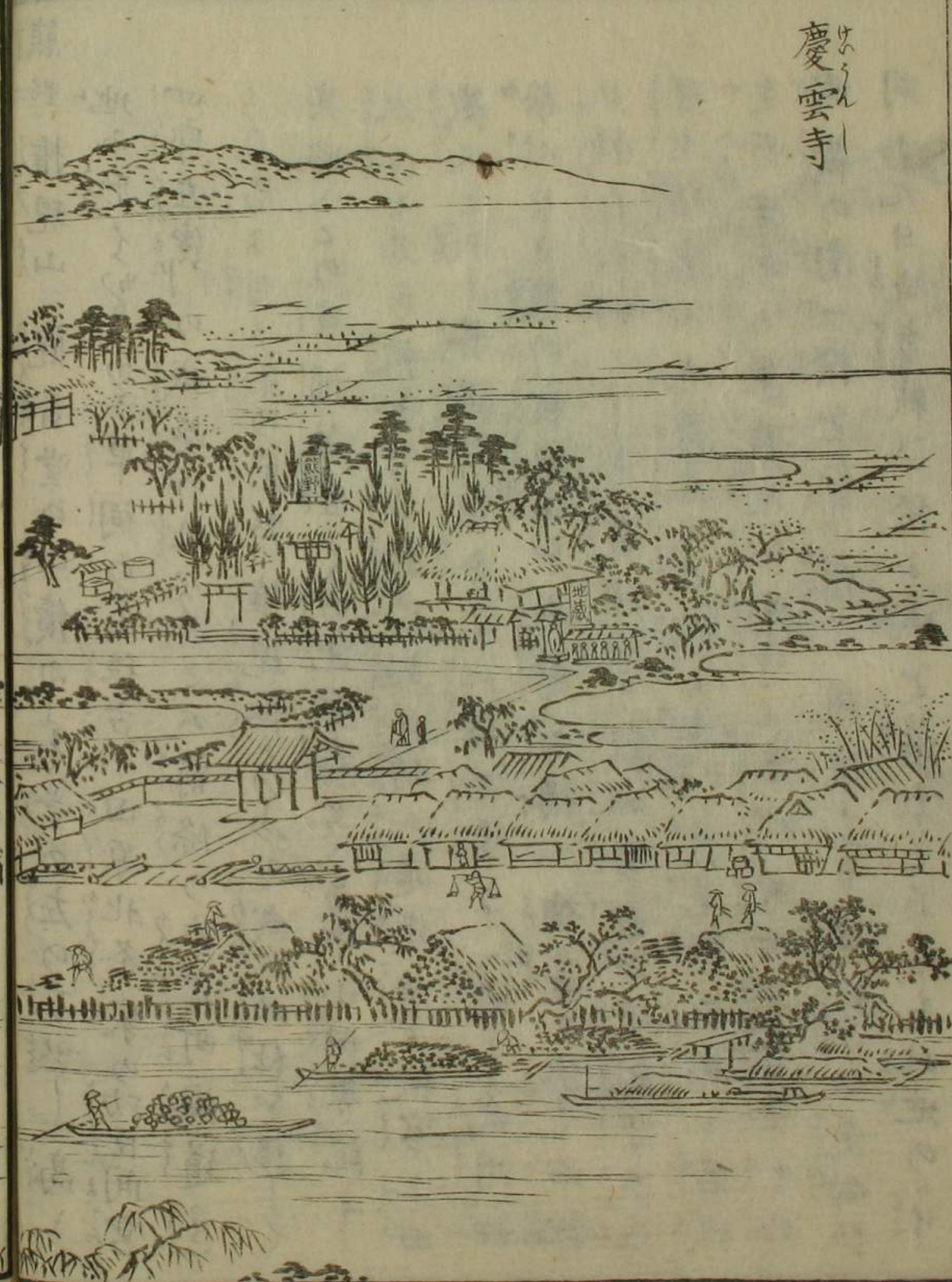


観音山



熊野推現山

地小形をかりある草祠あり往古小田原北条家の功臣間宮
 四郎左衛門の城壘の址なりと云前條の本宿町海道
 より右に付ふ所の熊野推現社あり或は此社を移して
 其跡へこの草祠を置く旧地を存せしめや小田原記
 永正七年の秋七月上杉治部少輔入道建芳被官上田
 蔵人と云一者謀叛を企て北條早雲よ一味一武州神
 奈川なる熊野推現山を城廓に構へ楯籠る依り治部
 少輔自大将と云々菅領より加勢成田下総守渋谷
 孫次郎藤田虎壽丸大石源左衛門長尾孫太郎名代
 矢野安藝入道長尾但馬守名代成田中務丞外
 武蔵の南一揆をかり催し同月十一日推現山を走向ひ
 同十九日追責戦ひ終り城を落せしめ此地のり



慶雲寺

小田原記云此山四方峻岬中岸高く時ち南に海北を深田なり
根城を取
西小山積りしとを削くと堀切て山積りる平覺寺の地藏堂と

吉祥山慶運寺茅草院と号鐘の橋の北詰より西の方へ一町半

本寺阿弥陀如来ハ立像三尺計あり
浄土宗花洛知恩院に属せ

上人中々文安四年丁卯開基との
聖觀上人ハ氏族未詳或ハ

東國紀行
江州甲賀源氏と初橋場の法源寺第二世となり又當寺を開創あり空徳
元年増上寺弟三世とあり文明年間一日火車と示現し空中に乘去り
辭世の頃及び和奇あり世ハ觀音の應化なりとのとをいへり又音
上人火車に乗せりハ新著聞集をもつとあり

中興開山ハ願故上人と号

宗牧
と批源の古きとありひびくところなり下畧
長老
宗牧

臥龍山雲松院 乾徳寺と号を滝の橋際より一里十四五町西の
當寺は宿りしとあり天文十四年三月三日なり

方小机村長津田街道の左側あり曹洞派の禪林や

遠州の石雲院に属せり本寺虚空藏菩薩ハ木佛にして
座像八寸計あり當寺ハ小机の城代笠原越前守信為開創

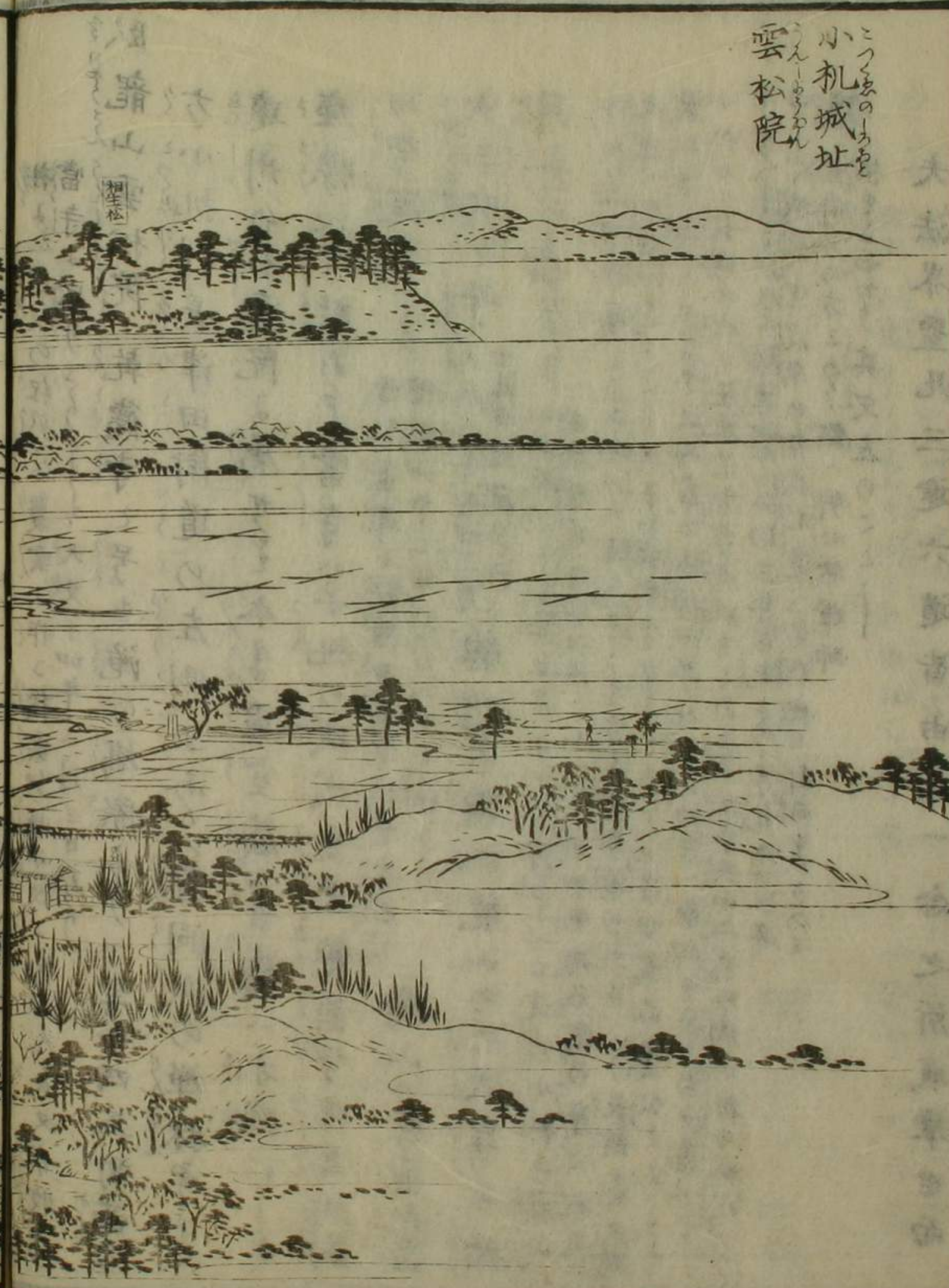
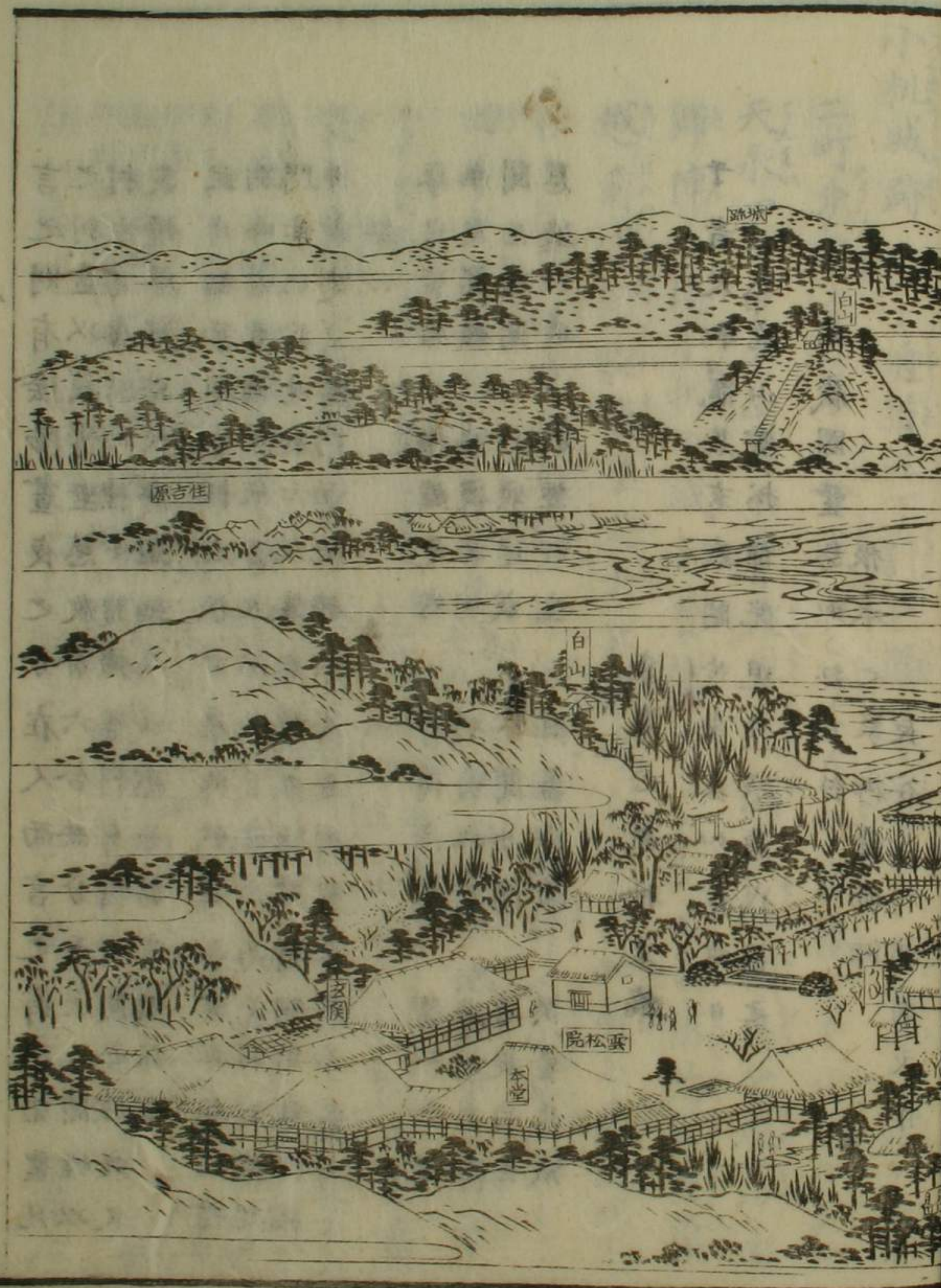
の寺院也
當寺靈牌ハ乾徳院殿雲松道慶庵主
開山ハ季雲永岳
明應四年己卯六月八日と注あり

大和尚と号
大永六年丙戌二月 總門の額臥龍山の三大字を僧
十五日化寂とあり

月舟の号あり
小田原記云弘治三年丁巳七月二十六日武州小机の城代
笠原越前守小田原より逝去を法名雲昌慶公庵主と

鐘
撰てあり其文左のこと

夫法界聖凡三途六道皆由人一念之所成舉世而



こつきの
小札城址
雲松院

言則有陰陽晝夜之分在人而言之有迷語聖凡
 之別蓋以我佛垂慈教六利有情同圓覺性故又
 利生事而種々隨機導曷勝言哉茲有
 設鐘聲佛諦技濟淪稱其功德曷勝言哉茲有
 武州都築郡小札庄根古屋鄉臥龍山雲松院住持
 別峰者曹洞之末孫大源汎遠州高尾石雲院之
 門葉也於是歲壬戌暮春積衆因質余銘而記之以
 并新建立樓門而施鐘於其梁因質余銘而記之以
 銘曰
 舉世皆暗惟鐘是明明聲傳法界警微幽冥
 幽處聞鐘幽處皆明明不通幽處善提自生
 聞而返聞行願速成無盡含識俱登化城
 恩遍六道利極四生

于昔天和龍集玄默闍茂季春如意珠日
 臥龍山雲松禪院現住宗贏代置之
 武藏國豐島郡江戶住家御鑄物師國永作
 東臯心越杜多稿

小机城跡同一通道五丁計を隔て道あり右の方城坂と云せ

二町沙登くあり土人ハ城山と号せり今官林とせ小田原記ハ

天永四年甲申正月十三日北条氏綱上杉朝興と攻落し

歸陣の後小机の城を普請ありと記せり依若臣笠原

越前守同能登守父子を城代とせ此所ハ居住せし

むとなり封境今南北一町余東西四町計の小阜に

回す小遣の形を存せり高六七中心の平地幾く百歩

たりあり今畠とせ古ハ橋樹郡都兼郡ハあり又笠原

家の臣沼上出羽とつる人の子孫今此地ハ存せ其家ハ

刀劍の類を収むると云内北条家今限帳ハ沼上とつる人ハ小机の

某と云あり又同書ハ笠原藤左衛門とつる人ハ小机ハ洲と領し笠原

佐渡とつる左衛門佐竹の内ハ小机島其輪と領せしあり笠原弥十郎ハ

高田亥番助ハ小机菅生の内と領し笠原平左衛門とつる人ハ小机

師岡地名と注しかくとせ扱ひつる越前守の氏族なりとあり

白山権現城山の東北山麓ハあり古の鎮守ありと云傳ハ

松龜山泉谷寺 本覚院と号し城山あり。五六町と隔て長津

田通道の左あり。大門三丁計。間左右に櫻の列樹あり

此地の小名と泉谷と。浄土宗なり。花洛智恩院に属せり。本

尊ハ一光三尊の阿弥陀如来本像あり。二尺八寸計あり

作者あり。當寺ハ鈴木但馬守とて人の開創あり

此人閑山と名蓮社見譽大道善悦大和尚と号す。弘治元年

化寂す。下徳飯沼。中門の前。天正十八年小田原北条家より建

弘徑寺の六世なり。天正十八年比制札あり

淡島明神社 相模街道大熊村に在り。左へ十三四町入る折本村に

あり。神主雲路氏奉祀を祭禮ハ二月三日縁日ハ毎月三日

十三日や。祭神ハ少彦名命及び神功皇后二座なり。勸

清の初ハ詳あり。櫻の老樹と新の老樹の傍に

櫻樹あり。神前東の方あり。昔土人此山に入り櫻の老樹を新

大なる蛇あり。其樹を削りて。里人恐る。今其社

迎ふあり。樹を削りて。里人恐る。今其社

其根株を削りて。里人恐る。今其社

淡島神祠之碑 寛保壬戌夏折本の邑長藤原英至とて人邑民と共謀り當社を新

せん。然るに其頃此地ハ松下某公の米邑あり。英至此を告ぐ。某公は

祠より進み地敷百歩とて此神祠に属す。英至退く。文を麻布善福寺の善上人

請ひ書と鳥石山人より頼む。頼むハ本多康桓竜の画ハ古山平國豊の筆なり

其文ハ。小田原北条家より頼む。頼むハ本多康桓竜の画ハ古山平國豊の筆なり

多目周防守宅地 青木町の中あり。お母とて其地定あり

小田原記 信玄小田原と襲ふ。茶下より多目周防守との項

青木との。居住し。程古戦録小田原信州上州の境西

我の城あり。上州の國峯岩倉若落去の時。死せり。其

小田原北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

被り。小田原記中。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を

北条家の領地。多目周防守とて吉原左兵衛義門の家臣あり。信を



原吉住

泉谷寺





師岡
熊野権現宮

折本村
淡島明神社



青木山あをきさん西向寺さいかうじ 同所どうじよ青木町あをきまちの横よこ小路こうじの右側みぎがはにあま虚無僧寺こむじやうじに

普化宗門ふけしゆもん金洗派きんせんぱいと称なづせ 本寺ほんじと号なづす物ものふ

本覚寺ほんかくじ切通きりどほり 同所どうじよ本覚寺ほんかくじの北きたの方かたの間まを切開きりひらき道路だうぢゆとを

張津田ちぢん通道とうだう及およ三澤さんざわ 永正七年えいせいしちねんの秋あき上杉治部かみすぎのしやうぶ少輔せうぶ入道にゅうだう建芳けんほうう

村等むらなうへの路ぢなり 被官ひくわん上田かみうだ蔵人くらひにん建芳けんほうは背そむき此地このちを打うち出だす熊野くまの権現山けんげんさんと

城廓じやうかく小取立ことりだて西にしは積つきさる山やまとハ其間そのまをハ堀切ほりきり本覚寺ほんかくじ

の地藏堂ぢざうだうを根城ねじやうとせしよし小田原記せうだわらぎにええしあり 権現けんげん野の

青木山あをきさん本覚禪寺ほんかくぜんじ 同所どうじよの南七軒町なんしちけんまちにあま曹洞そうどうの禪刹ぜんせつして

小札こふだの雲松院うんそういんは属ぞくを本寺ほんじと地蔵菩薩ぢざうぼさつハ一尺四五寸いちぢゆごすんの立像たつざう

なり 相傳あひつたふ當寺たうじハ嘉祿二年かりよくにねんの開創かいさうなり其後そののち天文紀元てんもんきげん

の年曹洞大源そうどうだいげんの未流みりゆう季雲きうん四傳しでんの法孫ほふそん陽廣やうくわう禪師ぜんじ此こゝに

住初すむく法幢ほふたうと建て禪風ぜんふうを起おこす 元祿げんりやくの初はつ殿堂でんだうハ佛ぶつ殿でんの

額がくは本覚禪寺ほんかくぜんじと書かせしし圓明寺えんめいじの開祖かいそ道山だうざん和尚おしょうの

筆ふでなりし

圓明山えんめいさん陽光院やうかういん本覚寺ほんかくじの南みなみに隣となり遠州えんしゆ可睡齋かすいさい退院たいいんの地ちは

石牛せきぎう天梁てんりやう 後のちの山やまを福聚峰ふくくわうほうと号なづす 門かどの額がくは福聚望ふくくわうぼうと書か

永平えいへい圓明えんめい禪師ぜんじの筆ふでなりし

道灌山だうくわんさん 同所どうじよ西にしの方かた北山きたさん中の字なななり昔大田道灌せうだいでんだうくわん入道にゅうだう此地このちは

城じやうを構かまへしりしありの号なづありしと云いふ

飯綱いひづな権現社けんげんじや 神奈川かんながは臺町たいまち海道かいだうの右みぎの山上やまの上にあま本覚寺ほんかくじあり

一町斗いちちゆうと南みなみあり別當べつたうハ真言宗まげんしゆしゆ同所どうじよの萬年山まんねんさん普門寺ふもんじ奉祀ほうじを

祭礼さいらいハ五月十七日ごごにじちちちちなり 飯綱いひづな権現けんげん本地ほんぢ佛ぶつを不動明王ふどうめいおう行基ぎやうき

大士だいしの作しやなり座像ざざう一尺七寸いちぢちすん坐ます 弘ひろ治ぢ承じやう四年しごうねん

右大将みぎだいしやう頼朝らいぢやう卿けい此こゝの像ざうと深く崇敬そんげいなりし 治承ぢやうじやう四年しごうねん

浅間社
せんげんしゃ



富士浅間祠 同所の南芝生村海道の右の方山の中腹にあり

必ひき如神の河派とてかへてこふ核を道とまぬへといハ 光廣
按小黄葉集は初五文字とあるまちのとありてあり待句のとつととやとより黄葉集をとおとく侍写のりありあり

袖の浦 此地の光景長汀曲浦さびく袖の形も似くさるる小名
 とそ鳥丸大納言光廣卿關東下向の頃帰路小再此地
 よきりあひく和歌を詠せし
其時みづくを深み詠草ハ此地
 江戸屋何某う家に秘免置り

八月伊豆國石橋山敗軍の後安房國へ渡海の時本宮の
 靈亦よりく風浪の難を逃れあひ其後竟小天下第一統を
 あひりハ文治年間此地小宮社造営ありく神領宮を寄
 らとありしとなし遙の後大田道灌此地よりとて老る信厚
 かりしと云

保土ヶ谷天徳寺とつる真言寺の持なり此地に一の
暗窟あり上俗是を富士の人穴と号く相傳昔頼朝卿
富士の裾野小御獵ありと一頃仁田四郎忠常よ命せしむ
富士の人穴の奥を究りしむ忠常終小此穴中に入りて抜
知りしとのみ誕譚よりとるなりとつるも古くより云傳る
お小是と闕みあつす

洲乾辨財天祠 芒新田横濱村よあり故小土人横濱辨天
と稱せし別當ハ真言宗中々同所増徳院奉祀を祭
礼ハ十一月十六日なり安置せし所の弁財天の像ハ弘法大師の
作りし江の嶋と同名此地ハ洲崎中々左右共海に臨み
海岸の松風を波濤よ響をうらむを尤佳景此地なり
海中姥島なり稱する奇巖ありと眺望を好む
秀美なり

